

# 「場所の記憶」の複合によるエコミュージアム型まちづくり

## ～館山まるごと博物館を事例として～

チョン イルジ  
鄭 一止 (神奈川大学助手)

### ■第1章 エコミュージアムとまちづくり

#### 1. 研究背景

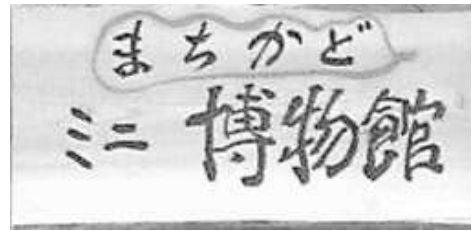
- (1) 目に見えない領域における可能性及び課題【WHAT】
- (2) 潜在的な地域力を活かした地域づくり【WHERE】
- (3) 学習活動を通して、地域の理解を高め、それらをつなぎ合わせながら、活用する【HOW】
  - A. 「場所の記憶」の特異性、重層性を活かすための要件
  - B. まちづくりの課題及び提案
  - C. エコミュージアムの課題及び可能性
    - (a) エコミュージアムの特徴及び課題
    - (b) エコミュージアムの可能性

#### 2. 研究の目的

### ■第2章 館山まるごと博物館

1. 戦争遺跡を守る
2. 房総里見氏の歴史・文化を守る
3. NPO法人安房文化遺産フォーラムの設立及び構成
4. 活動域内における連携ネットワーク
  - (1) 青木繁《海の幸》誕生の家と記念碑を保存する会
  - (2) かにた婦人の村
  - (3) 安房地域母親大会
  - (4) 千葉県歴史教育者協議会
  - (5) NPO法人全国生涯学習まちづくり協会
  - (6) その他
5. NPO法人安房文化遺産フォーラムの取り組み
6. アーカイブ（記録の蓄積）の構築
  - (1) 「学習」活動の流れ
  - (2) 地域を調べる
  - (3) 伝える（間接的）
  - (4) 共有する（普及・交流活動）





7. 「場所の記憶」の1次的複合
8. 「場所の記憶」の2次的複合～ローカル・キュレーターの展開
  - (1) 「場所の記憶」の複合の類型及び取り組み
  - (2) 「場所の記憶」の複合の意義
9. 「場所の記憶」の複合と共発的なまちづくり
  - (1) 共発的なまちづくりの展開
    - A. 「場所の記憶」の複合に基づくネットワーク
    - B. 「場所の記憶」の複合におけるまちづくりの展開プロセス
  - (2) エコミュージアムに関わった参加者の展開プロセス
    - A. 様々な分野におけるローカル専門家やテーマ型組織との連携
    - B. 参加者の展開プロセス
    - C. 積極的なサポート
    - D. 柔軟な役割・テーマの移動
  - (3) ローカル・キュレーターの展開プロセス
    - A. 複合の必然性を生む要因
    - B. ローカル・キュレーターの展開プロセス
  - (4) 空間づくりへの展開
    - A. 建造物の保存・活用
      - (a) まちかどミニ博物館～渡米したアワビ移民の資料館
      - (b) 青木繁《海の幸》誕生の小谷家住宅
      - (c) その他
    - B. 空間まちづくりへの展開
      - (a) 青木繁ゆかりの富崎地区の活性化事業
      - (b) 福原有信ゆかりの松岡区の活性化事業
      - (c) 「場所の記憶」に基づいたエリア分け及び設定
    - C. アドバイザーとしてのまちづくり活動
10. まとめ
  - (1) 無数の「場所の記憶」におけるアーカイブ化の取り組み
  - (2) 戦争における「場所の記憶」を拠点とする様々な記憶の複合
  - (3) 地域内外との開かれた交流
  - (4) 地縁型組織との連携体制
  - (5) 語り部からローカル・キュレーターへの展開
  - (6) 地域全体における総合性

## ■第1章 エコミュージアムとまちづくり

### 1. 研究背景

文化財や遺跡などの単体としての文化史的・学術的価値だけではなく、目に見えない領域を含めて有形無形の文化遺産を複数つなぎ合わせた総合的視点の中で、新しい価値をもたらすという地域遺産に対する考え方が注目されはじめている。街並みや工場や倉庫などの近代産業遺産をはじめ、狭い路地、生活習慣、ちょっとした物語など、些細で目に見えない「場所の記憶」までを、地域ならではの遺産として捉え直し、総合的に活用しようとする動きである。このような現象が、どのようなものを対象とし【WHAT】、どの地域が必要であり【WHERE】、どのように扱うべきであろう【HOW】という問いかけを研究の背景とする。

#### (1) 目に見えない領域における可能性及び課題【WHAT】

特定の場所やまちでの思い出は、人々の心を豊かにさせてくれる大切な存在である。これらは「場所の記憶」という言葉で表すことができる。それは、人々間でのコミュニケーションや、時間の蓄積の中で、街並みや地域文化と同じような共通用語となる。人々のつながりやまちの場所とのつながりのある地域として展開し、より个性的で豊かな地域にさせていく原点といえる。

しかし、グローバリゼーションによる大都市圏への集中や、大量の文化既成化が進んでいくと、前述のような「場所の記憶」による良い循環ができなくなり、各地域では衰退が進み、地域文化が途切れてしまうという現状がある。このような課題の中で、単体としての文化史的・学術的価値がある文化財だけでまちづくりを展開してきた地域はあるものの、ほとんどは不十分な組織体制や人々の思いだけで、結局は単発的な取り組みとなり、人々のつながりも欠いているところが多い。

その中で、指定文化財だけではなく潜在的な地域遺産など、目に見えない領域を含め総括的な取り上げ方をして、地域ならではの新しい文脈づくりによるまちづくり、もしくは地域活性化の手法をとることが注目されている。

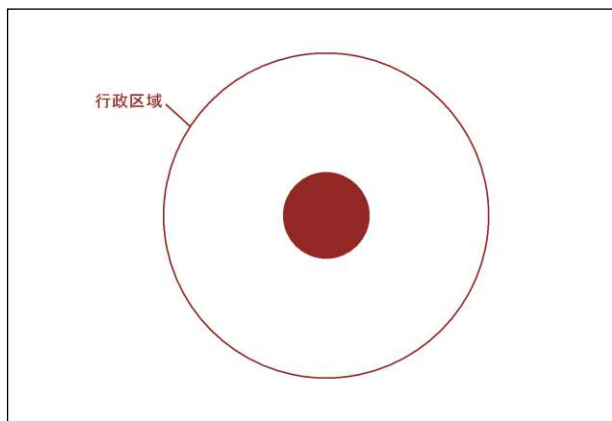
まちづくり分野でも、「空気」のような日常生活に根ざした景観を見つけ出し、それを「生活景」と呼び、しかも市民力によって「生活景」に新たな形をつけていこうという動きが起きている（日本建築学会、2009）。一方、環境の文化的価値を評価する視点の一つとして、「文化的景観」が取り上げられている。これは、多様な意味を示す地域の景観を評価し、「価値ある景観の物語が実感できることが求められている」のである（西村幸夫、2009）。特に、自然との関係性を重視する欧米と異なり、日本では景観を「生活又は産業」と「風土」の相互作用としてとらえているため、都市や集落などの地域において、「文化的景観」の対象とすることが可能になっている。また、複数の国指定文化財を条件とした国内の世界文化遺産暫定リストづくり事業（2007-2008）や、地域の風景の中でアートを展示していく「大地の芸術祭」などが展開されている。

欧米では、1980年代における多文化主義の議論に基づき、90年代からそれらを都市計画と結び付けようとする様々な実践が行われるようになった。早稲田大学理工学術院の後藤春彦教授が日本に紹介した、ドロレス・ハイデンの『場所のカーパブリック・ヒストリーとしての都市景観ー』（2005）では、ロサンゼルス都市景観を媒介と見なし、多様な市民たちの記憶を再解釈・再構成しようとした取り組みを見ることができる。

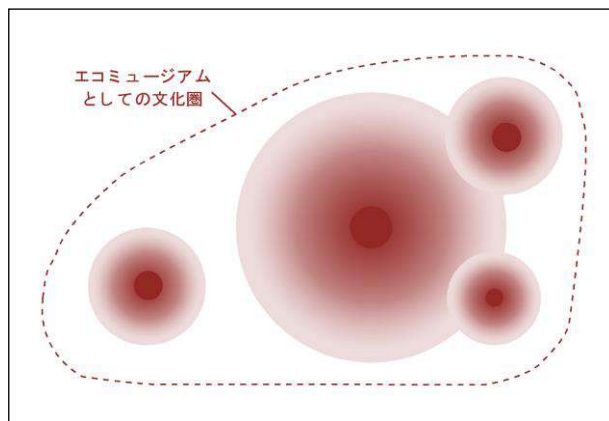
まちにおける道路や街並みをはじめ、思い出の場所などが蓄積された「ヒューマン・アーカイブ」に基づき、地域における記憶が再構成され、地域への帰属感だけではなく新しい価値として生み出されている。（クォン・サング、2013）。

もちろん、東京大学大学院の西村幸夫教授によれば、地域の重層性や場所性を持つ要素を拾い上げ

て、バックグラウンドとなる地域の物語として示していくことは、これまでの一体的で象徴的な地域全体像を目指してきた都市計画や地域づくりと異なった手法であるという（西村幸夫、2009）。そのため、地域全体像としての地域性を総括的に深めていく際に、前述の要素を拾い上げて、それをまとめていく具体的な方法論はまだ議論されていない。「場所の記憶」などの目に見えない領域は、固定化されてしまう時点で、持続性・柔軟性という特異性を失ってしまう恐れがあり、持続的に柔軟性をもたせることが重要なポイントになってくる。



一般的な地域遺産



目に見えない領域を含んだ地域遺産や場所

## （２）潜在的な地域力を活かした地域づくり【WHERE】

どのような地域に、潜在的な地域力を活かした取り組みが必要となるのであろうか。まず、潜在的な要素を持っていても、視覚的な要素が現れていなかったり、単に気がつかなかったりするために衰退現象が進んだ地域は、その緊急性が高いといえよう。前述のように、目に見えない領域や地域の過去に着目して、些細であっても地域の「宝物」を見つけ出していく取り組みが必要になってくる。

グローバル化による大都市圏への集中という現象の中で、地方には大都市に追いつかないといけない、距離的にも依存しないといけないという観念がもたらされた（北原啓司、2011）。その結果、かつては繁栄していた町だとしても、大都市から離れば離れるほど農山間地域や地方都市では、どんどん衰退が進んでいる。そのような状況の中で、地域ならではの固有性を活かしたまちづくりの必要性が少しずつ認識されつつある。

なかでも、水俣病の熊本県水俣市や炭鉱の多かった福岡県大牟田市のよう、マイナスのイメージを持つ地域などでは、そのような要素をできるだけ隠して、他地域と同じような一般的なテーマの地域づくりを目指してきた。しかし、NGOやNPOなどの市民団体や観光戦略のなかで、「負の遺産」といえる過去を含んだ地域史を明らかにした上で、むしろそれを地域力として活かそうとする動きが現れ始めている。

もちろん、経済や人口がより集中してくる大都市、または地域ブランディングに成功した観光都市においても、前述のような目に見えない領域、つまり「場所の記憶」からの視点が必要だと考えられる。それまでの大きな一筋の文化要素だけではなく、些細な地域遺産まで視野に入れることを通して、地域内に多様性や個性をもたらすことが必要になってきている。

## （３）学習活動を通して、地域の理解を高め、それらをつなぎ合わせながら活用する【HOW】

### A. 「場所の記憶」の特異性、重層性を活かすための要件

目に見えない領域を扱うためには、まず、テーマを固定せずに地域全体を対象とする視点

(integrity) と柔軟的な仕組み (flexibility) が必要とされる。同時に、柔軟でありながらも安定性のある持続的なルールを保っていくことも重要となる。それにより、持続的・柔軟的に「場所の記憶」を掘りおこし活用するだけでなく、「場所の記憶」同士をつなぎ合わせていくことができるのである。また、些細な「場所の記憶」を扱うことで、権力者や専門家ではない、無名の生活者が主体的に関わるようになり、それが新たなネットワークを形成する可能性をも生みだすと考えられる。その結果、地域に対する「文化的な帰属意識の内から形成される地域アイデンティティ」(後藤春彦、2012) が、柔軟的かつ持続的に展開・進化していかだろとうと思われる。

## B. まちづくりの課題及び提案

持続的で柔軟的な仕組みとしての「まちづくり」をどう見たらよいのであろうか。

1970年代前後から生まれはじめた日本の「まちづくり」は、住民主体のボトムアップ型に基づき、居住環境の改善や地域活性化を目指してきた。しかし、都市計画との組み合わせの中で、地域協議会などを代表とする公共的事業や枠組みに頼る形に変容していた(佐藤滋、2011)。それは絞られた一部の場所性や固まった視点とともに、専門家が地域づくりとして描いたプランとゴール(テーマ)に沿ったもので、一部の地域住民のリーダーが合意形成したにすぎない、言わば都市計画型の「まちづくり」であった。

こうした中で、地域における重層的・場所的・点在的な地域遺産を明らかにするツールとしては、前述した地域住民一人ひとりの記憶に基づき、場所の姿を再生しようとする取り組みが始まりつつあった。東京の谷中や滋賀県長浜市などで行われている取り組みが、その事例として挙げられる。そこでは個人レベルでのニーズや考えを拾い上げ、解決しようとする活動から、それらをつなぎ合わせた並列的な「まちづくり」、つまりプラットフォーム的な取り組みも見られていた。

しかし、多様な内容を総合的に捉えることは難しく、あるテーマや目的に基づいたネットワーク化の取り組みになっていた。また、前述のようにリーダー中心の都市計画型の「まちづくり」と、後者の並列的な「まちづくり」の間には大きなギャップが存在し、それをつなぎ合わせる手法はほとんど取り組まれていない状況であった。もちろん、個人個人をリアルタイムでつなぎ合わせ、共有する場をつくることで、新たな認識・アイデアを生み出すネット上での可能性は注目されていたものの、まだ初期段階に留まっており、実際の場所での取り組みとは異なって、臨場感に欠けていたといわれている。

もちろん、早稲田大学理工学術院の後藤春彦教授が提唱しているまち内外のつながりによる「共発的なまちづくり」のように、他の組織や地域間での交流と連携を通じて、お互いに欠けている部分を補える体制をつくっていかうという地域も現れている。「共発的なまちづくり」とは、後藤春彦によれば、生態系のように、地域の資源や能力を価値付け活用していく内発的な取り組みだけではなく、地域外からのものも積極的に受け入れ地域内外のパートナーシップを構築するモデルと定義されている。

## C. エコミュージアムの課題及び可能性

ここでは、ばらばらに展開しがちな「まちづくり」の提案手法として、また「場所の記憶」における重層性を取り扱う手法として、エコミュージアムの取り組みに着目してみる。

エコミュージアムは、「場所の記憶」に基づき、それを収集・編集しアーカイブ(記録の蓄積)を構築するだけではなく、生涯学習や地域観光などに活かしていく取り組みでもある。そのため、地域住民が主体的に関わり、地域内外の多様なネットワークを広げるなど、「まちづくり」という視点は欠かせない。一方、「まちづくり」においてエコミュージアムは、アーカイブ化による持続性を持たせるだけではなく、普段顔が見えてこなかった一般住民の関心向上、新たな地域文脈づくり、それに基づいた都市計画につなげられるなど、エコミュージアムと「まちづくり」とはお互いに補完的な関係といえる。

では、持続的で柔軟な仕組みとして、エコミュージアムの取り組みはどうであろうか。

#### (a) エコミュージアムの特徴及び課題

エコミュージアムとは、地域の代表的・象徴的な文化遺産だけではなく、地域全域にわたり、地域住民一人ひとりの思いや知識までも地域遺産として見直して活かしていくことであり、地域ならではの特徴を見出そうとする取り組みである。すなわち、地域全域を対象とし、持続的に展開していく仕組みといえる。

しかし、前述のような趣旨とは異なり、実際に日本のエコミュージアムでは、部分的なテーマや視点に沿った展開がメインであり、より広範囲にわたるテーマへの展開や活用はほとんど見られなかった。すなわち、農山間地帯や鉱山地帯などの地域的性格の明確な地域における主要な特徴のみに限定され、地域といっても行政区域の中の歴史や民俗、自然など学芸員のそれぞれの専門分野の範囲内で、また仕掛け人の限定された視点に基づく記憶を掘り起しただけのところが多かった（丹青総合研究所編、1993）。その上に掘り起された記憶や地域遺産を単に観光ルートなどによってつなげ、案内する程度に留まっていた。つまり、多様性に基づいた地域全体にわたるストーリーづくりというよりは、来訪者の立場からの現地体験を重視した姿といえる。そこには固定された視点を超えた新たなテーマによるつなぎ合わせの取り組みは、ほとんど見られなかった。もちろん、近年では「三浦半島エコミュージアム」のように、本格的なネットワーク形成に取り組んでいる地域も現われている。しかし、具体的にどのようなつなぎ合わせが形成されているのかなどの実態は、まだ把握されていないようである。

欧米のエコミュージアムにおいても日本の状況と似ており、コミュニティによって新たに地域像が創られるのではなく、博物館などから固まったイメージとして先に提示されてしまう傾向がある

(Dicks B.、2000)。それは、地域の特徴が定められてしまうため、コミュニティはそのイメージに頼ることになってしまうと、多くの社会学者が指摘している (Peter Davis、2004)。さらに、流行りのイメージやテーマを求めてしまう傾向も見られる。

また欧米の課題としては、専門性の不在や地域住民の参加欠如に対する懸念が挙げられている (Peter Davis、2004)。一方日本では、学術性の担保や住民の非専門性に対する議論が行われているものの、その議論は欧米より多岐にわたり様々な意見が出されている (馬場憲一、2007)。

#### (b) エコミュージアムの可能性

それでも 2005 年以降、エコミュージアム事例の中では、地域の学習と学習観光の両面を目的として、より多様で開放的な視点に立ち、つなぎ合わせをおこなう方法論が少しずつ進化・蓄積されてきている。すなわち、前述のような一般的方法論として、地域全体を対象とし些細な「場所の記憶」を掘りおこすだけではなく、それを新たな視点でつなぎ合わせ共有することによって、さらに新たなエコミュージアムの可能性を創り出していったといえよう。それにともない、地域住民が主体的にエコミュージアム活動を営むようになってきたことが注目される。

したがって学習活動としての大まかな枠組みは維持しつつも、ある空間や分野などにこだわらず、開放的で多様な視点による「場所の記憶」を探り出していく日本型エコミュージアムに着目したい。

## 2. 研究の目的

本稿では、千葉県館山市の市民活動として取り組まれてきた「館山まるごと博物館」を対象として、「まちづくり」の視点に基づくエコミュージアムの検証を行う。具体的には、エコミュージアムの取り組みの実態をまとめた上で、3つの観点よりエコミュージアム取り組みを評価し、まちづくり展開のメカニズムを明らかにする。

## ■第2章 館山まると博物館

「館山まると博物館」の取り組みを把握するため、大きく①「場所の記憶」のアーカイブ化、②「場所の記憶」の複合、③共発的まちづくりという3つの評価基準に基づき動向分析を行う。最後に、館山まると博物館を手がかりにエコミュージアム型まちづくりの展開メカニズムを検証する。

### 1. 戦争遺跡を守る

館山市や安房地域に多くのこる戦跡は、他地域と同じように戦後から放置されたままであり、あるいは開発に伴い破壊されていた。このような状況の中で、県立高校の社会科（世界史）教師であった愛沢伸雄教諭は、1989年から歴史教育における地域教材のひとつとして戦跡を活用し、授業実践をスタートさせている。その間、生徒たちや地域の人びととともに戦跡の調査研究を進めながら、1993年には、高校の郷土研究部の生徒たちや『消えた砲台―少年と館山砲術学校』（東銀座出版 1991年）の著者である山口栄彦氏らとともに、市内で「学徒出陣50周年」展を企画し、調査報告の展示を行った。

戦争関連資料はほとんどなかったものの、当時の関係者の聞き取りなどを中心に本格的な調査研究に取り組んでいった。特に、防衛省防衛研究所の戦史資料や戦時中の学校の記録をはじめ、体験者の証言などを蓄積していった。その結果、館山を中心とした安房地域におけるアジア太平洋戦争の様子が少しずつ明らかになってきた。例えば、戦争末期に「本土決戦」が想定され、7万人の軍隊が配置されていたことや、そのための陣地や軍事施設が構築されたこと、食糧増産のため花禁止令が出されたことなどである。また明治期からは、帝都東京を防御する「東京湾要塞」として大規模な砲台群が建設され、住民は厳しい規制と監視下に置かれていた。戦争末期には本土決戦に備えた特攻基地などがつくられていくなかで敗戦となった。ミズーリ号での降伏文書調印式の翌日、1945年9月3日にはアメリカ占領軍3,500名が上陸し、沖縄以外で唯一「4日間」の直接軍政が敷かれたことなども分かってきた。

一方、平和教育の素材として戦跡に注目していた愛沢教諭が所属する千葉県歴史教育者協議会（以下、歴教協と略）の安房支部では、戦跡の調査研究と、戦争体験や証言から平和のあり方を見つめ直そうと呼びかけ、1994年12月に地域の教員や市民など160余名が「戦後50年・平和を考える集い」実行委員会（加藤俊夫委員長・愛沢伸雄事務局長）を結成した。その後1年近い活動のなかで、戦跡のフィールドワークをはじめ、調査研究の報告や証言の発表の場として「戦後50年を考える」講座を重ねていった。そして、これまでの取り組みを集約する形で、1995年8月には「戦後50年・平和を考える集い」が開催された。安房地域の人びとと戦争や戦跡に関わる資料や証言を発表する大規模な企画展となり、3日間で1,000名以上の市民が参加した。この後も活動は続き、近隣町村の要請で開催した企画展には、通算で5,000名を超える来場者があった。

奇しくも同年2月には、「広島・原爆ドーム」のユネスコ世界遺産登録に先立って文化財保護法の基準が改正されて、国内にある戦跡に対する評価も変わり、文化庁でも戦跡を近代遺産として位置づけるようになった。同時に、全国各地で戦跡の調査・研究と史跡化としての保存を目的として組織された「戦争遺跡保存全国ネットワーク」と連携を図り、保存運動は進められていく。

この間、愛沢教諭が館山地区公民館主催の郷土史講座や戦跡フィールドワークの講師となったことで、「戦後50年」に取り組んだ市民らが公民館活動に参加し、戦跡の保存・活用について関心を高めていった。歴教協全国大会における教育実践の報告や各種メディア報道が契機となって、愛沢教諭に直接、平和研修を依頼してくる団体が増えていった。公民館活動を通じて戦跡の保存・活用に関心を持つ市民有志が中心となって、2003年になって同公民館の登録団体「戦跡調査保存サークル」（愛沢伸雄代表。以下、戦跡サークルと略）が発足した。後に設立されるNPOフォーラム事務局長の池田恵美子氏もサークルメンバーの一人であり、「戦跡ガイド」として活躍していた。



こうした実践活動のなかで、再三にわたり市当局へも保存を呼びかけ、市議会でも取り上げられた。この流れを受けて館山市企画課は、2002年、愛沢教諭らが積み重ねてきた調査研究にもとづいて、(財)地方自治研究機構との共同調査研究を行うこととし、調査報告書『平和・学習拠点形成によるまちづくりに関する調査研究—館山市における戦争遺跡保存活用方策に関する調査研究』をまとめた。それによると、全国的にも貴重な戦跡が多い館山市では、それらを組み入れた都市づくりの目標像として「地域まるごとオープンエアミュージアム・館山歴史公園都市」を掲げている。これに基づいて、戦後払い下げられて市有地となっていた館山海軍航空隊赤山地下壕跡（以下、赤山地下壕跡と略）が、自治体によって整備され、2004年に一般公開となった。この年にNPOフォーラムが発足しただけでなく、「戦争遺跡保存全国ネットワーク」（十菱駿武・村上有慶共同代表）に加盟したことで、急遽、第8回戦争遺跡保存全国シンポジウム全国大会の開催依頼を引き受けている。NPOフォーラムでは、現地実行委員会を立ち上げるとともに、館山市・同教育委員会に呼びかけたところ共催となったのである。

このような活動の蓄積により、NHKや全国紙などのメディア報道を通じて安房地域の戦跡が注目され、平和学習に対する関心が高まり、全国からスタディツアーの依頼が多くなっていく。

## 2. 房総里見氏の歴史・文化を守る

江戸時代後期に曲亭馬琴（滝沢馬琴）によって著された『南総里見八犬伝』はNHKの人形劇として放送されたこともあり広く知られているが、そのモデルとなった戦国大名里見氏が実在していたことはほとんど知られていない。170年間にわたって多くの海城を築き、安房国（現在の安房地域）を治めていたが、江戸初期に改易されたこともあり、地域においてはその価値があまり認識されていなかった。

1996年、里見氏城跡群の一つ稲村城跡を壊して、市道を建設する計画が立てられた。着工寸前であったが、ちょうどその頃、戦跡の保存・活用を訴える活動を始めていた愛沢教諭は、地域にとって貴重な文化遺産である稲村城跡を守らなければ戦跡は残せないと考え、急遽市民らとともに「里見氏稲村城跡を保存する会」（愛沢伸雄世話人代表・島田輝弥事務局長。以下、稲村保存会と略）を結成した。全国の歴史研究者や城郭の専門家、特に千葉城郭研究会や文化財保存全国協議会などの支援を受けて、城跡破壊をストップさせ、保存と活用のために史跡化していこうとする市民の文化財保存運動が始まったのである。すぐに取り組んだ署名運動では全国から約1万筆が集められ、数度にわたって館山市議会へ請願書を提出した。

2年後に市道建設計画は中止となり、次の目標であった里見氏城郭群の国指定史跡化にむけて、様々な文化活動に取り組んだ。市民らはヤブだらけであった城跡を3年がかりで刈り、遺構に手づくり看板を立て、ウォーキングルートを整備し、粘り強く市民向けの啓蒙活動を続けていった。

里見氏研究のシンポジウムや講演会、ミニ講座などの学習会、あるいは全国向けには「南総里見フォーラム」という大きなイベントを開催した。足もとの地域の歴史を学ぶために「里見ウォーキング」や「里見の道ウォーキング」、里見氏史跡バスツアーやJRと連携した「駅からハイキング」などを企画し、市民ガイドを養成する講座も開き、意欲的に参加する市民が「里見ガイド」となって活躍していった。中でも「南総発見フォーラム」のイベントが縁となって、里見氏発祥の地である群馬県高崎市榛名や、改易された里見忠義の終焉の地である鳥取県倉吉市などとの市民交流も盛んに行われるようになり、特に全国里見一族交流会との交流の中で房総里見会や「南総里見手づくり甲冑愛好会」の活動も活発になり、「南総里見まつり」や「里見桜」の植樹など多様な連携によって市民文化の交流が広がっていった。こうした保存運動に関わる取り組みには延べ2万人以上が参加し、その後の里見氏の歴史文化を活用した地域づくり活動につながっていった。

2005年からは館山市や教育委員会が稲村城跡の国指定史跡へ取り組み始め、歴史研究者や学識経験者



とともに、愛沢氏は市民代表として稲村城跡調査検討委員会の委員を委嘱された。2011年、館山市教育委員会から国指定史跡の報告書が文化庁に提出され、翌2012年1月に稲村城跡と岡本城跡は里見氏城跡群として文化庁より国史跡の告示を受け、17年にわたる保存運動は実を結んだ。同年5月に里見保存会の主催で開いた「講演シンポジウムと祝賀のつどい」では、県・市・教委をはじめこれまで関わった官民が後援となる記念すべき出来事となった。所期の目的を達成した稲村保存会は7月に解散となり、史跡整備を含めた取り組みはNPOフォーラムに継承された。なお、国史跡「里見氏城跡 稲村城跡」保存管理計画策定委員会が引き続き設置され、市民代表として愛沢氏が委員を委嘱されている。

### 3. NPO法人安房文化遺産フォーラムの設立及び構成

中世の城跡と近現代の戦跡に関する調査・保存とガイド活動の実践を積んできた稲村保存会と戦跡サークルが母体となり、主要メンバーがともに発起人となって、2004年1月に、文化遺産を活かした地域活性化を旨としたNPO法人南房総文化財・戦跡保存活用フォーラム(2008年5月改称)が設立された。理事長(代表)には両団体の代表であった愛沢伸雄教諭が就任し、それぞれの団体は互いの立場を尊重して協働しながら、戦跡や里見氏城跡だけではなく、広く地域遺産を視野に入れて地域づくりに取り組んでいくことになる。なお、翌年3月には愛沢教諭が定年より8年早く退職し、事務局長の池田氏とともにNPOフォーラムの専従となり、メンバーは「あわがいど」として活躍している。

現在のNPOフォーラムでは、14名の運営委員(法上の理事)が主な責任を持ち、地域にある歴史・文化遺産の調査研究とガイド事業、それらを紹介した書籍等の出版事業、その他多様なまちづくり事業を企画・実施している。主たる事業であるスタディーツアー全般のコーディネートは事務局長の池田氏が担当し、年間延べ3,000名を案内している。正会員数は120余名、賛助会員を含む総数は約260名(2013年6月基準)であるが、主な活動メンバーは40~50名である。会員のほとんどは定年退職した中高年世代である。彼らは自分の職歴や経験、ひいては個人ネットワークを活かし、新しいライフワークとしてNPO活動に参加している。年間予算は毎年変動するが、920万円程(2013年基準)で、文化財や戦跡を活用したガイド事業や出版した書籍の販売事業による収入が主であり(300万円程)、他に会費(40万円程)、助成金や寄付金などから成り立っている。

### 4. 活動域内における連携ネットワーク

#### (1) 青木繁《海の幸》誕生の家と記念碑を保存する会

少子高齢化の深刻な館山市富崎地区コミュニティ委員会との協働で、2008年に発足した地縁型の任意団体(嶋田博信会長)であり、NPOフォーラムが事務局を付託されている。青木繁が滞在し《海の幸》を描いた小谷家住宅は、保存運動により館山市指定文化財となった。小谷家当主(小谷福哲氏)、館山市教育委員会生涯学習課、全国の画家らが組織するNPO青木繁「海の幸」会(大村智理事長・吉岡友次郎事務局長)とともに小谷家住宅の保存・活用に関する四者協議会による話し合いを重ねながら、修復基金を募り、2014年度から着工、2016年春竣工・公開を旨としている。館山市では特定事業を指定した寄付に対して税控除が受けられるよう、「館山市ふるさと納税」制度を整備した。

#### (2) かにた婦人の村

社会復帰が困難な女性たちのために、1965年に深津文雄牧師が開いた長期婦人保護施設(五十嵐逸美施設長・天羽道子名誉村長)。運営は社会福祉法人ベテスタ奉仕女母の家。軍の砲台跡を払い下げた土地を造成したため、施設内に戦跡(128高地「戦闘指揮所」壕や「噫従軍慰安婦」碑)があり、NPOフォーラムが連携を図って人権・平和研修を実施している。地域教材を活用した愛沢氏の授業実践における原点の場所である。

### (3) 安房地域母親大会

「原水爆禁止」「子どもの生命を守る」の訴えを原点とした日本母親大会に連動した安房地域の大会で、1995年から毎年開催されている。国連NGO新日本婦人の会館山支部・鴨川支部、全日本年金者組合安房支部、市町村職員組合連絡協議会安房地区女性連絡会、NPOフォーラムが構成団体となっており、池田氏が実行委員会副委員長を務める。

### (4) 千葉県歴史教育者協議会

歴教協は歴史教育の教員をはじめ、歴史の学習・研究に関心を持つ市民によって、1949年に全国組織として誕生し、千葉県でも結成された。社会科の授業づくりだけでなく、地域の生活と歴史を掘り起し、地域に根ざして歴史と現代社会を学ぶ活動を進めてきている。中でも千葉県歴教協は、千葉県を中心にその歴史や現代社会の諸問題を学び合い、特に子どもが主役になる社会科の授業づくりや市民が主役になる地域づくり活動を進めてきた。現在、安房支部は全国でも珍しい法人会員としてNPOフォーラムが活動しており、愛沢氏が支部代表を兼ねている。千葉県歴教協は年1回の教育研究集会を開き、関東ブロック大会や全国大会も年1回、各県持ち回りで開催している。ここで発表されてきた愛沢代表の授業実践や池田氏の地域づくり実践の報告レポートは会誌にも掲載され、NPOフォーラムの理念や実践活動につながっている。最近では、会員もそれぞれの調査研究やNPO活動の実践を研究集会で発表し、切磋琢磨している。

### (5) NPO法人全国生涯学習まちづくり協会

聖徳大学の福留強名誉教授を理事長とし、「生涯学習とまちづくり」を研究・実践する学習団体で、2000年に教育・行政・民間ボランティアなど多様な分野の人たちが集って「魅力あふれるまちづくり」を目的に結成された。地域に根ざした個性的なライフスタイルの創造、コミュニティの形成、リーダーの養成などを目標にし、生涯学習の推進とまちづくりの交流を進めるとともに、豊かな地域づくりの研究・実践活動を進めている。NPOフォーラムが生涯学習をまちづくり構想の柱にしていることもあり、館山市でのまちづくりの実践は全国生涯学習まちづくり協会を通じて全国に紹介されており、池田氏は講師として招かれている。

### (6) その他

NPO法人千葉自然学校をはじめNPO法人たてやま・海辺の鑑定団、NPO法人たてやま・海辺のまちづくり塾、南総里見手づくり甲冑愛好会など、多様な市民活動団体とゆるやかなネットワークの交流と連携により、地域づくりが進められている。なお、消えそうな歴史や自然などを調査・記録する目的で1992年につくられた豊津会（2003年解散）は、地域資料や証言を共有化して「場所の記憶」の蓄積を図り、まとめた報告集『豊津のあゆみ』はNPOフォーラムの調査活動に今なお重要な示唆を与えている。

## 5. NPO法人安房文化遺産フォーラムの取り組み

前述したように、中世の城跡や近現代の戦跡を主な手掛かりとしながら、徐々に幅広い視点を持つようになったNPOフォーラムでは、現在、主に①地域にある戦跡、②地域にある里見氏関係を中心とする文化遺産、③青木繁ゆかりの漁村の文化遺産、④地域の国際交流の痕跡の4つを主な対象とし、その調査研究・保存・活用を行っている。中でも、赤山地下壕跡を中心とする平和学習や地域づくり視察などのスタディツアーは、年間約100団体、延べ3,000人ほどである。なお、文化交流の拠点として歴史建物「小高記念館」の管理運営や、NPO会員を中心に地元住民が語り手となる「知恵袋講座」などを定期的に開催している。

国際交流においては、2005年に明治期に渡米したアワビ漁師と戦争の歴史をテーマに「虹のかけ橋～

ウミホテルとアワビがむすぶ日米交流」と、ハングルが刻まれた「四面石塔」（千葉県指定文化財）を学ぶ「日韓子ども交流」の二つの事業を開催し、2007年には「快鷹丸遭難100年供養の日韓交流」、2008年に「第9回日中韓青少年歴史体験キャンプ」を開催している。5日間にわたって日本・中国・韓国の3カ国の高校生や大学生ら160余名が集まって、この地の戦跡や東アジア交流史を見聞したことを通じて歴史認識や平和創造を語り合う機会をつくった意義は大きい。愛沢氏が千葉県立安房南高校教員時代の1994年から生徒会ボランティア委員会で始めたウガンダ支援交流は、統廃合により安房高校JRC（青少年赤十字）部を経て、現在はNPOフォーラムが事務局となって私立安房西高校JRC部へと継承され、20年にわたる息の長い取り組みとなっている。

一方、2008年にJRと千葉県が共催した「ちばDC（デスティネーション）キャンペーン」事業では、駅前商店街の空き店舗を活用した「まちかどミニ博物館」や、館山市主催の「南総里見まつり」に連動した「戦国こすぶれ大会（八犬伝ワールド）」などを実施したり、さらに地域の食文化を見直す郷土料理の調査研究を目的に「食文化フォーラム」を呼びかけ、館山市保健推進協議会と協働して「おらがごっつお（我が家のご馳走）」のレシピ開発などを、幅広く様々な活動に取り組んでいる。

同年には国土交通省の「新たな公」によるコミュニティ創生モデル事業の助成を受けて、「青木繁《海の幸》誕生の家と記念碑を保存する会」（以下、青木保存会と略）の文化財基金の案内書や、ウォーキングマップ富崎、漁村のレシピ集「おらがごっつお富崎」などを手がけている。

2011年から文化庁の「文化遺産を活かした地域活性化」事業に選定され、NPOフォーラムと青木保存会は協働して「青木繁《海の幸》フォーラム」や「青木繁《海の幸》フェスタ～輝け富崎！コミュニティのつどい」などの学術的・事業や国内外交流事業を展開している。また、「元気なまちづくり市民講座」・「ヘリテージまちづくり講座」の開催、さらには「館山まるごと博物館」を紹介するDVDや日・英・韓の3カ国語でそれぞれのパンフレットなどを作成している。なお、富崎地区においては青木保存会を中心に地域住民の協力により、「青木繁《海の幸》ゆかりの地」をめぐるエコウォークや旅行企画、漁村の伝統的な家庭料理の調査研究・調理実習などを行ってきた。



ガイドブック『あわがいで①戦争遺跡』



『小学生が見つけたタカラガイ図鑑』



漁村のレシピ集『おらがごっつお富崎』



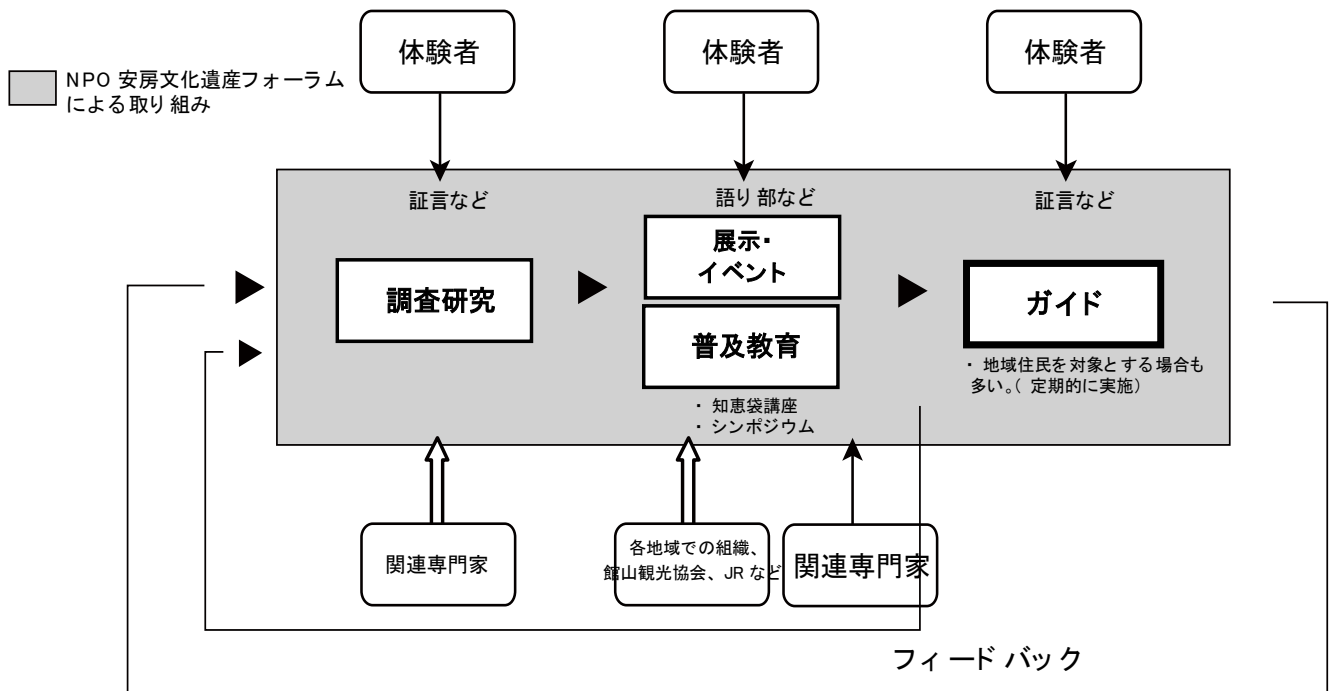
「館山まるごと博物館」のDVDと日英韓パンフレット

NPOフォーラムの年ごとの活動内容

	主な活動	連携団体
2004	<ul style="list-style-type: none"> <li>・NPO法人南房総文化財・戦跡保存活用フォーラム設立 (1月設立・5月法人認証)</li> <li>・戦争遺跡保存全国シンポジウム館山大会共催(現地実行委員会)</li> <li>・館山市観光立市推進協・歴史・文化の保存活用プロジェクト(座長)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・戦争遺跡保存全国ネットワーク</li> <li>・館山市など</li> </ul>
2005	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「日韓子ども交流」浦項製鉄西初等学校 20名との交流</li> <li>・国土交通省「半島いきいきネットワーク」モデル事業として選定</li> <li>・「虹のかけ橋～ウミホテルとアワビがむすぶ日米交流」共催</li> <li>・NPOフォーラム主宰「ウミホテル合唱団・安房」結成</li> <li>・映画『赤い鯨と白い蛇』撮影協力(原案・ロケ地選定など)</li> <li>・「地震津波シンポジウム南房総」主催</li> <li>・「青木繁《海の幸》100年、から布良・相浜を見つめるつどい</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・浦項製鉄西初等学校</li> <li>・米モンレーの有志</li> <li>・館山ユネスコ協会</li> <li>・館山音楽鑑賞協会</li> <li>・富崎地区コミュニティ委員会</li> </ul>
2006	<ul style="list-style-type: none"> <li>・館山市稲村城跡調査検討委員会委員委嘱(国指定史跡に向けて)</li> <li>・小高記念館オープン</li> <li>・里見ガイド講習会・里見ガイドモニターツアー</li> <li>・赤山地下壕跡・館山城跡ガイドサービス</li> <li>・第6回里見ウォーキング</li> <li>・内閣官房長官賞～あしたのまち・くらしづくり活動部門受賞</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・館山市教育委員会</li> <li>・稲村保存会</li> </ul>
2007	<ul style="list-style-type: none"> <li>・観光まちづくり研究会</li> <li>・八犬伝井戸端会議・八犬伝ロマン紀行ハイキング(ちばDC)</li> <li>・ふるさと探検隊・まちなかウォーク・画家の愛した漁村ウォーク</li> <li>・映画『赤い鯨と白い蛇』上映会</li> <li>・11月小谷家住宅の文化財申請</li> <li>・2～4月 まちかどミニ博物館開催(ちばDC)</li> <li>・「たてやま・まちなか探検隊」開催</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・NPO全国生涯学習まちづくり協会</li> <li>・劇団員の火</li> <li>・富崎地区コミュニティ委員会</li> <li>・館山市・JR東日本</li> <li>・館山市教育委員会</li> <li>・館山市観光協会</li> </ul>
2008	<ul style="list-style-type: none"> <li>・NPO法人安房文化遺産フォーラムと改称</li> <li>・県NPO助成事業「元気なまちづくり市民講座」全8回開講</li> <li>・青木繁《海の幸》誕生の家と記念碑を保存する会結成(事務局)</li> <li>・安房の地域医療を考える市民の会呼びかけ 「地域医療の危機と看護学校問題を考える集い」開催</li> <li>・第1、2回「戦国こすぶれ大会～八犬伝ワールド」開催</li> <li>・八犬伝ロマン紀行ハイキング</li> <li>・ウガンダ安房南洋裁学校緊急支援バザー</li> <li>・千葉県文化の日功労賞～地域観光振興部門受賞</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・千葉県</li> <li>・NPO全国生涯学習まちづくり協会など</li> <li>・富崎地区コミュニティ委員会</li> <li>・全国の美術関係者など</li> <li>・安房医師会</li> <li>・館山病院</li> <li>・地元医師や看護婦など医療従事者</li> <li>・館山市・館山市観光協会</li> </ul>
2009	<ul style="list-style-type: none"> <li>・無言館・窪島誠一郎氏講演会共催</li> <li>・第3回戦国こすぶれ大会～八犬伝ワールド開催</li> <li>・国土交通省「新たな公」によるコミュニティ創生モデル事業選定</li> <li>・文化財保存全国協議会:第10回和島誠一賞</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・無言館</li> <li>・館山市・館山市立博物館</li> <li>・国土交通省</li> <li>・文化財保存全国協議会</li> </ul>
2010	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「元気なまちづくり市民講座」～漁村が誇る3つの“あ”のまちづくり</li> <li>・エコウォーク・癒しの海辺のまちづくり講座</li> <li>・第9回日中韓青少年歴史体験キャンプ開催(現地実行委員会)</li> <li>・日本都市計画家協会・まちづくり教育部門特別賞</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・富崎地区コミュニティ委員会</li> <li>・日中韓青少年歴史体験キャンプ実行委員会・館山市教委・南房総市教委</li> <li>・千葉県・ちば国コンベンションビューロー</li> </ul>
2011	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文化庁 地域の文化資源を活かした地域活性化事業(～2014)</li> <li>・青木繁《海の幸》フォーラム</li> <li>・万石騒動安房三義民300年祭(実行委員会)</li> <li>・安房医療介護福祉連携・東日本大震災支援の会(AWA311-MCW)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・館山市教育委員会・文化庁</li> <li>・石橋財団ブリヂストン美術館</li> <li>・館野地区館山市文化財保護協会</li> <li>・安房地域の医療介護福祉従事者有志</li> </ul>
2012	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「青木繁《海の幸》フェスタ～富崎コミュニティのつどい」</li> <li>・元気なまちづくり市民講座</li> <li>・千葉県歴教協研究集会安房集会(現地実行委員会)</li> <li>・大神宮義民七人様330回忌法要</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・青木保存会・館山市教委</li> <li>・NPO全国生涯学習まちづくり協会</li> <li>・千葉県歴教協</li> <li>・神戸地区大神宮</li> </ul>
2013	<ul style="list-style-type: none"> <li>・富崎小の活用、若手劇団員がミュージカル披露</li> <li>・ヘリテージまちづくり講座開講</li> <li>・「青木繁《海の幸》フェスタ～富崎コミュニティのつどい」</li> <li>・「館山ふるさと松岡の偉人・福原有信を語るつどい」開催</li> <li>・シンポジウム「館山まるごと博物館」開催</li> <li>・小谷家住宅のひな祭り公開見学</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・(財)地球友の会・劇団歌舞人</li> <li>・NPO全国生涯学習まちづくり協会</li> <li>・青木保存会</li> <li>・富崎地区コミュニティ委員会</li> <li>・福原有信を語り継ぐ会・松岡区</li> <li>・資生堂企業資料館</li> </ul>
2014	<ul style="list-style-type: none"> <li>・青木繁《海の幸》誕生の小谷家住宅の修復着工(予定)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・青木保存会・NPO 青木繁「海の幸」</li> </ul>

NPOフォーラムと館山市の取り組みとの関係

年度	NPOフォーラムによる学習活動	他組織による活動	行政
1989	・「かいた婦人の村」訪問・地域教材による平和学習授業実践	・歴教協教育研究集会で平和学習の授業実践報告・会誌発表	-
1992	・大巖院「四面石塔」の調査研究	・地域研究会「豊津会」の結成	-
1993	・戦跡における本格的な調査研究 ・学徒出陣 50 周年「洲ノ空」 「館砲」企画展	・「南総里見手づくり甲冑愛好会」の結成	-
1995	・「戦後 50 年・平和を考える集い」	安房地区高等学校郷土研究部	・館山市・市教委後援
1996	・「里見氏稲村城跡を保存する会」結成	・「戦争遺跡保存全国ネットワーク」の結成	・稲村城跡内に市道建設計画(市議会に請願書提出)
2000	・「南総発見フォーラム～花と里見と八犬伝」開催 ・歴教協関東ブロック集館山集会	・NPO法人「全国生涯学習まちづくり協会」の設立	・館山港を中心に観光・レクリエーションを目指す「館山港港湾振興ビジョン」策定
2002	・日韓歴史交流シンポジウム「ハングル四面石塔」 ・日韓歴史教育交流会館山シンポジウム	・千葉県日本韓国朝鮮関係史研究会 ・日韓教育実践研究会	・館山大棧橋の計画発表
2003	・館山地区公民館登録団体「戦跡調査保存サークル」の結成	・「豊津会」解散	・『平和・学習拠点形成によるまちづくりの推進に関する調査研究－館山市における戦争遺跡保存活用方策に関する調査研究－』報告書
2004	・NPO法人「南房総文化財・戦跡保存活用フォーラム」の発足 ・千葉県NPO活動費補助金事業に選定(2004-2008年) ・戦跡ガイド講習会 ・第 8 回戦跡保存全国シンポジウム館山大会	・NPO法人「たてやま海辺の鑑定団」の発足	・館山海軍航空隊赤山地下壕跡の整備・一般公開  ・館山市・市教委の共催
2005	・「戦後 60 年」～南房総平和フェスティバル 2005 ・「虹の架け橋～ウミホテルとアワビがむすぶ日米交流」 ・日韓子ども交流	・「ウミホテル合唱団安房」結成と初演コンサート(館山ユネスコ協会、館山音楽鑑賞協会との連携)	・赤山地下壕跡が館山市指定文化財 ・千葉県 NPO 活動費補助金事業選定 ・館山市共催
2006	・千葉県 NPO 活動費補助金事業に選定 ・食文化研究会「食文化フォーラム」	・館山市保健推進協議会	・館山市地域支援補助金
2007	・戦国こすぶれ大会	・館山市観光協会	・館山市観光振興補助金
2008	・NPO法人安房文化遺産フォーラムへ改称	・小谷家住宅が館山市指定文化財	
2009	・国土交通省「新たな公」によるコミュニティ創生モデル事業に選定	-	・小谷家住宅の館山市指定文化財への指定
2010	・日本都市計画家協会 まちづくり教育部門特別賞受賞	・小谷家住宅修復のため全国の画家がNPO法人「海の幸」会を結成	-
2011	・文化庁 地域の文化資源を活かした観光振興と地域活性化事業(青木繁・没後 100 年記念～《海の幸》を描いた館山の漁村活性化・観光振興事業)に選定	・青木繁没後 100 年で久留米市 ・石橋財団石橋美術館 ・久留米連合文化会 ・青木繁旧居保存会	・館山市策定で文化庁事業 ・館山市ふるさと納税に「小谷家住宅の保存活用に関する事業」指定の制度導入
2012	・文化庁事業の継続 ・元気なまちづくり講座	・小谷家住宅の保存活用に係る四者協議会	・稲村城跡の国史跡指定 ・館山市策定で文化庁事業
2013	・文化庁事業の継続 ・ヘリテージまちづくり講座 ・ふるさと松岡の偉人・福原有信を語るつどい ・シンポジウム館山まるごと博物館	・館山市松岡区 ・福原有信を語り継ぐ会 ・青木繁「海の幸」誕生の家・小谷家住宅の修復と公開に関する三者覚書の作成と締結	・館山市策定で文化庁事業 ・館山市教委生涯学習課と連携しての「四者協議会」 ・館山市後援



学習活動の流れ



大蔵院の「四面石塔」

## 6. アーカイブ（記録の蓄積）の構築

エコミュージアム活動の最も基本的な取り組みとして、NPOフォーラムでは「場所の記憶」をどのように調べられ、伝えられ、共有されているのかについてまとめる。なお、地域において特定の分野に詳しい地域住民を「ローカル専門家」と呼称することとする。

### (1) 「学習」活動の流れ

出来事などによって取りあげ方に違いがあるものの、基本的には対象地域やテーマが決まると、NPOフォーラムのローカル専門家たちは、まず関連地域でのまち歩きや住民からの聞き取りなどの基本調



査（調べ活動）から始める。そして、地域史や学校の古い日誌やなどの関連文献を読み、専門家や関連組織からのアドバイスをもらいながら、本格的な調査研究を行う。さらに、その調査研究をまとめて、市民講座や報告会などでの講演（伝える活動）となるが、その際に語り部や展示会、あるいは交流イベントなど様々な形のイベントと連動させて、より多く人びとが興味・関心をもつように取り組んでいる。

一方、調査研究に基づいたガイドブックなどの冊子の発行や、市街地活性化としてNPOフォーラム事務所である小高熹郎記念館や自慢の「宝物」をもっている商店には「まちかどミニ博物館」の看板を掲げて展示コーナーを設置、また 2005 年には館山の戦跡を舞台に館山出身の女性監督による映画『赤い鯨と白い蛇』の制作と翌年には 1,000 人を超える上映会開催、さらには『南総里見八犬伝』をモチーフにした紙芝居や戦国コスプレ大会など、様々な企画によって、一般の人びとが気軽に情報やイベントに接するように工夫している。これらの活動が積み重ねられ、実績が蓄積されていく中で、行政や商工観光業者などと連携が広がり、たとえばJR「駅からハイキング」など市民が主役となって活躍する大きな取り組みが可能となっている。

NPOフォーラムの設立当初、愛沢代表らが中心となって実施していた講演会や調査研究会などの普及教育（共有する活動）は、会員たちの興味・関心のある分野ごとのウォーキングで「里見ガイド」「戦跡ガイド」「まちなかガイド」などが育ち、会員が体験してきたことや日頃の調査研究を発表する「NPO知恵袋講座」の講師など、会員が主体的に取り組んでいくNPO活動のとして広がっている。あるいは発展的に「安房・平和のための美術展」（以下、平和美術展と略）などの芸術活動も誕生している。

## （２）地域を調べる

前述したように、地域教材化から始まり、公民館活動を通じて戦跡の調査研究に関心をもった市民らが、10 余年にわたり戦跡を歩いて地道に調べたことが、赤山地下壕跡などを一般公開して「市指定」史跡につながった。同様に、稲村城跡保存運動でも市民らが実際に歩いて地域の歴史文化を調べる活動が館山市や地権者、地元住民を動かし、17 年という歳月を経て、国史跡指定という目標の達成につながっていった。

戦跡や里見氏以外にも、愛沢氏は並行して地域を調べる活動に取り組んでいた。そのひとつが大巖院にある千葉県指定文化財「四面石塔」である。1624（元和 10）年建立で各面に朝鮮ハングル・中国篆字・印度梵字・和風漢字で「南無阿弥陀仏」と刻まれている珍しい史跡だが、これまでに先行調査はなく、関係資料もあまり見当たらなかった。ハングルは現在使われていない創成期の書体であり、韓国でもまだ発見されていないという貴重な石塔であった。愛沢教諭はこれを地域教材とし、県立安房南高校や長狭高校の現代社会や世界史の授業実践に取り組んだ。建立年は、秀吉の朝鮮侵略から 33 回忌にあたり、拉致してきた朝鮮人を帰還させる外交事業の第 3 回朝鮮通信使兼刷還使が来日した年であった。生徒たちは調べ学習を通して、「石塔は平和祈願と戦没者供養の想いをこめた建立したのではないかと推察し、小論文を書いた。この実践は千葉県高等学校歴史部会や歴教協全国大会で発表され、その後、日韓教育実践研究会主催の韓国普州集会で発表し反響を呼んだ。これが契機となり 2002 年に「四面石塔」の歴史交流シンポジウムや日韓歴史教育交流会が館山で開催され、2005 年には韓国の浦項製鉄西初等学校の児童が来日して館山の家庭に民泊する「日韓子ども交流」につながった。

また、明治期に房総からアメリカ・モンレーに渡ったアワビ漁師たちの移民の歴史に注目し、その調査研究に 10 年以上たずさわってきたローカル専門家らがいた。日米開戦後に日系人強制収容所に送られたアワビ移民たちが、房総半島を目標としたアメリカ軍の日本本土侵攻作戦計画「コロネット作戦」の情報収集に巻き込まれていったのではないかと想定のもと、愛沢氏はローカル専門家らと共同研究を進めていた。「戦後 60 年」の 2005 年に開かれた「虹のかけ橋～ウミホテルとアワビがむすぶ日米



交流」に合わせて、調査資料集『太平洋にかかる橋〜アワビがむすぶ南房総・モントレイの民間交流史』が日英2ヶ国語で編集された。なお、渡米移民のリーダー小谷兄弟の弟仲治郎が学んだ水産伝習所（現東京海洋大学）の初代所長・関澤明清は、館山を拠点として近代水産業や水産教育に大きな役割を果たしており、その調査研究も同時に進められている。

近年、NPOフォーラムが8年にわたって取り組んできた地域の調べ活動がどのような展開になっているかを紹介する。1904年に青木繁が滞在し西洋画では日本最初の重要文化財になった《海の幸》が描かれた富崎地区（布良・相浜）は、かつてマグロ漁で栄えた漁村である。青木繁没後50年を記念して、全国の画家などの募金によって建立された記念碑があり、1989年に行政によって破壊されそうになったものの住民運動によって保存された。この地域は近年の水産業衰退によって、少子高齢・過疎化が急速に進み幼稚園が廃園になった。このことを憂慮した同地区連合区長会長吉田昌男氏は、2005年NPOフォーラムに地域活性化の協力を要請してきた。奇しくも、石橋財団ブリヂストン美術館では「青木繁《海の幸》100年」展が開催されていたため、同地区コミュニティ委員会に「布良・相浜の“海の幸”を語る会」を呼びかけた。その結果、2005年12月「青木繁《海の幸》100年」から布良・相浜を見つめる集いの開催となり、座談会の登壇者になった吉田氏は「青木繁《海の幸》記念碑を保存する会」の発足を呼びかけ、青木繁が滞在した小谷家住宅の当主・小谷栄氏からは「築130年の古い家だが、地域活性化のためなら、このまま残して役に立てたい」と発言があった。

これを受けて、NPOフォーラムでは地区住民とともに、《海の幸》が誕生した漁村の景観や生活史に着目して調べ活動を進めるとともに、小谷家住宅が文化財として可能であるかどうかを古建築の専門家に調査依頼した。そして2007年、文化財的価値が認められるとの報告書が作成され、それに基づいて小谷家当主は、館山市教育委員会に文化財指定申請書を提出したのである。個人が直接申請を出す事例はこれまでなかったという。翌年、NPOフォーラムと富崎地区連合区長会とが連名で「小谷家住宅と記念碑の保存・活用に関する要望書」を館山市長と教育長に提出した。同時に富崎地区コミュニティ委員会の役員や地域の著名人、全国の画家・美術関係者らが発起人となって、青木保存会を発足し、NPOフォーラムが事務局を付託された。その秋に小谷家住宅が館山市文化財に指定されるが、建物を後世に残すためには修復が必要であると記載された。市の条例では指定文化財の維持修理費は所有者負担と謳われており、全国の画家と自治体とともに資金の確保に向けた動きが生まれている。

一方、2006年にNPOフォーラムの事務所となった小高熹郎（としろう）記念館（以下、小高記念館と略）は、大正期の銀行を昭和初期に移築した洋館風の木造建物であり、所有者の故小高熹郎（元衆議院議員・館山市名誉市民）は、政治活動だけでなく近代水産業や地域文化の振興に尽くした人物であった。小高記念館の裏手にある高台は「北下台（ぼっけだい）」と呼ばれ、明治期に館山町が初めて公園としたところで、前述の関澤明清の顕彰碑や正木灯台跡など貴重な地域遺産がありながら、地域では忘れ去られていた。NPOフォーラムではこれらの調査研究を進めて、北下台周辺が日本の近代水産業や水産教育の発展において重要な役割を担ってきた地であることが分かってきた。

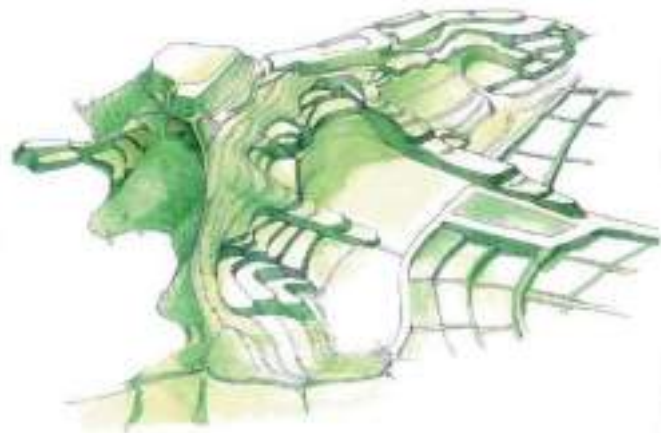
なお、安房地域における食文化の調査や伝承にも目を向けたNPOフォーラムでは、館山市保健推進協議会に呼びかけ、池田氏がリーダーとなって「安房・食文化フォーラム」というプロジェクトを立ち上げた。その活動の中でレシピを募集して、2007年7月に郷土料理レシピ集『おらがごっつお（わが家のご馳走）』が発行され、安房地域の食文化を考えるうえで一石を投じた。富崎地区においても、漁村の主婦である青木保存会の会員が中心となって地区内にアンケート調査をして、富崎版レシピ集『おらがごっつお』を2010年4月に発行した。このようにまとまったレシピ集は、市民を対象とした調理実習やウォーキングの際のおもてなしに活かされ、青木保存会作成のウォーキングマップにも紹介されている。このような調べ活動は、市民一人ひとりの調査研究が積み重ねに基づいていることは言うまでもない。

### (3) 伝える (間接的)

文化財保存運動において最も重要だったことは、その価値を住民に伝える啓蒙活動である。稲村保存会では、稲村城跡のガイドマップを作成した遺構をめぐるガイドイベントや、毎年1回実施していた里見氏の城郭から城郭の古道を歩く「里見の道ウォーキング」や、ミニ講演会と里見氏ゆかりの寺社や城郭の現地見学とを合わせた「里見紀行」を行った。2000年には、全国から里見氏の末裔やゆかりの人びとや行政関係者を招聘した「南総発見フォーラム」を企画し、千葉県や安房地域の自治体や関係団体の後援を得て、里見氏の歴史文化を紹介するイベントを開催した。1997年の「わたしたちの稲村城跡大発見フェア」では、城跡を紹介する資料や手作りのジオラマを展示してきた、同年から始めた「里見ウォーキング」では、里見ガイドや戦跡ガイドら市民が各ポイントで解説するスタンプラリー形式とし、翌年にはJRと連携した「駅からハイキング」として大規模に開催された。17年にわたる稲村保存会の活動は、報告集『里見氏稲村城跡を見つめて』(1～5集)として伝えられている。

NPOフォーラム発足後も、両団体は協働して稲村城跡保存運動を継続していくことを確認し、活動方針に位置づけた。中でも稲村城跡については、安房地域全体にある複数の里見氏城跡群としての史跡化を目指していたため、各自治体に呼びかけるだけではなく、地域にある様々な団体と連携を図りながら、里見氏の歴史文化を知らせていく多様なイベントを企画していった。

特に、若者や一般市民に知らせるために、手作りの紙芝居『南総里見八犬伝』を制作し、各種ウォーキングや「里見桜まつり」などのイベントで披露した。また、2008年から3回にわたって「戦国こすぶれ大会～八犬伝ワールド in 館山」を開催し、日本の若者文化「コスプレ」と館山の市民文化「手づくり甲冑」のコラボレーション企画を実施した。これまでにはない文化遺産の活用方法として注目され、NHKなど各種メディアを通じて発信された。



里見氏稲村城跡 (俯瞰図)



戦国こすぶれ大会

戦跡の保存運動においても、前述のように「戦後50年」の取り組みや戦跡サークルを通じて、現地調査やフィールドワークを行ってきた。そして、赤山地下壕跡が一般公開されたことを機に、愛沢氏は千葉県歴史協編集の『千葉県の戦争遺跡をあるく』『学校が兵舎になったとき』をはじめ、岩波ジュニア新書『戦争遺跡から学ぶ』や中公新書『日本の戦争遺跡』など多くの書籍を執筆し、歴史教育や生涯学習あるいは教育観光の会誌・冊子などに論文を発表した。NPOフォーラムの自主事業としては、『戦争遺跡』『房総里見氏』『海とともに生きるまち』『足もとの地域から世界を見る～授業づくりから地域づくりへ』など分かりやすい冊子を編集し、ガイド活動や販売を通じて普及活動に利用している。公民館との協働による地図づくり講座を開催し、調査内容を視覚的に知らせるための『あわがガイドマップ』シリーズも作成している。



あわがいどマップ①「海軍のまち 館山」（イラスト作図 中屋勝義）

NPOフォーラムの主たるガイド事業としては、10名以上の来訪団体を対象にスタディツアーを受託し、映像を用いた座学（ミニ講演）・現地ガイド・ガイドブックをセットした有償プログラムを実施している。個人や小グループ向けには、毎月第一日曜日の午前中に赤山地下壕のガイドサービスを通じて普及活動を行っている。特に座学では、多様な文化遺産を総合的に「館山まるごと博物館」として紹介し、戦跡や水産史など様々な近現代史との関わりを立体的に伝え、リピーター誘致の活動につなげるとともに、先人たちの姿から学ぶ「平和・交流・共生」の精神をNPOフォーラムの理念として伝えている。なお、戦跡ガイドの場合、関連資料が少なく、捉える観点によって様々な解釈がありうるので、特別なマニュアルは作成していない。ただし、年4、5回実施しているフィールドワークに参加し、愛沢氏の調査結果を現地で学ぶとともに、ガイド自身の経験や考え、共感したことなどを語ってもらうようにしているという。

館山には終戦直後の1945年9月3日にアメリカ占領軍が館山に上陸してきた歴史的な出来事があるが、愛沢氏はアメリカ公文書館から公開されたフィルムを入手し、その一部が館山周辺であることを発見した。中でも占領軍の機甲部隊が館山海軍航空隊水上飛行機格納庫前の滑走路付近に上陸してきた場面は歴史的な出来事であり、2009年9月3日に「アメリカ占領軍上陸撮影フィルム上映会」を館山地区公民館と共催で企画し、証言を呼びかけた。地元新聞の予告もあって100名以上の市民が来場し、会場は熱気にあふれた。年配の市民らは記憶をたどりながら「上陸後のアメリカ占領軍を見た」と証言し、「フィルムに映っているのは自分だ」という貴重な証言者もあらわれた。この上映会で証言した市民らは、その後館山地区公民館主催の「戦争体験を語る会」（2009年12月）などで、見聞や体験を詳細に語っている。さらに、海軍初の落下傘部隊として1941年9～12月に館山で特殊訓練を受け、1942年1月にティモール島の奇襲攻撃に参加した版画家・秋山巖氏が証言を語るトークショーを開催した。これを聞いた当時の小学生からは、落下傘降下訓練を見たという証言も集まってきた。

また、戦時下の子どもたちには館山湾に生息するウミホタルの採取命令があり、乾燥した粉末に水分を含ませると再び発光するという性質を軍事利用する研究が進められていたということも、愛沢氏の調査によって明らかになっていた。スタディツアーでは、生きたウミホタルの発光現象を見せるとともに、証言者は平和の語り部となって活躍した。こうした活動の中から、合唱組曲『ウミホタル～コスモブルーは平和の色』が誕生している。戦跡見学とともに、この曲を歌うことで生徒たちの平和学習に活かさ

れていった。2005年4月、この合唱組曲を知らせるために「ウミホテル合唱団・安房」が結成され、同年9月に開催された日米交流のイベント「虹のかけ橋～ウミホテルとアワビがむすぶ日米交流」において市民180余名で合唱された。

#### （４）共有する（普及・交流活動）

20余年にわたって続けてきた調査研究を基に、地域についてさらに知ってもらい、新たな人的ネットワークを構築・拡大するために、様々な講演会やシンポジウム、交流イベントを実施している。2004年に開催した「第8回戦争遺跡保存全国シンポジウム館山大会」では、戦争遺跡保存全国ネットワークとNPOフォーラムを中心とする現地実行委員会の取り組みに館山市が共催している。この大会は主に戦跡の保存運動に関わっている市民や研究者による集会であり、全体会では、館山市の戦跡の保存・活用の現状や構想について館山市教育委員会文化財担当者が基調報告した。また、分科会ではNPOフォーラムが安房地域の「戦後50年・平和を考える集い」や戦跡サークルによる調査研究のこと、あるいは戦跡保存運動の経緯などを報告し、全国の人びととの交流の機会にした。なお、現地見学会や地域報告、あるいは証言者の集いでは、NPOフォーラムの戦跡ガイドをはじめ、地域の戦争体験者など多くの市民が参加した。この年は館山市が赤山地下壕跡を一般公開したこともあり、戦跡を保存・活用するまちづくりの意義を広く普及する機会となり、官民が情報を共有して戦跡によるまちづくりを協働して取り組んでいく、画期的なスタートの年になった。

そして、「戦後60年」の節目にあたる2005年、NPOフォーラムの呼びかけで実行委員会を結成され、前述の「虹のかけ橋～ウミホテルとアワビがむすぶ日米交流」が開催された。歴史を共有する日米の関係者が一堂に会した初めての国際交流となり、会場には市内外から1,000人の来場者があった。アメリカの日経移民史の研究者サンディ・ライドン氏の講演と、カリフォルニア生まれの堂本暁子千葉県知事（当時）による英語対談も行われ、日米両国での研究成果が共有された。

そればかりでなく、安房地域母親大会や安房平和のための美術展、平和映画祭など地域内で企画されていた様々な平和イベントをつなぐ連携を各団体に呼びかけ、「南房総平和フェスティバル2005～子どもたちに平和を渡そう」というキャンペーン事業を展開した。このように情報を共有しながら、地域住民の創意工夫による多様な平和イベントを相互に普及することができ、その後のNPOフォーラムの活動においては、様々な市民団体と協働していく交流の契機となった。

さらに発展的事業として、2007年6月、房総アワビ移民のリーダー小谷源之助の末子ユージン・コダニ氏とその娘キミさんが来日し、「日米のかけ橋となったアワビ漁師と画家～小谷源之助・仲治郎と小圃千浦の足跡をたどる」と題した講演会と交流会が開催された。

なお、富崎地区においては、2005年12月「青木繁《海の幸》100年、から布良・相浜を見つめるつどい」や、2011年8月に開催された「青木繁《海の幸》フォーラム～布良という聖地」などを通じて、学術専門家だけではなく、青木繁の遺族や富崎の漁師たち、漁村の生活文化を描いたエッセイストなどがパネリストとなって、青木繁が滞在した時代の地域像を共有していく機会となった。住民たちが多数参加したことで臨場感のある地域交流の場となり効果的な普及活動になっていった。なお、青木繁が《海の幸》を描いた漁村の布良は、美術界の「聖地」と呼ばれている。

一方、地元住民と一緒に活動が続けていく中で、専門家に近い専門知識や履歴、趣味などを持つ地域住民や市民がたくさんいることを知り、彼らを語り手とする場として「NPO知恵袋講座」が定期的で開催されるようになった。この講座は、毎月1回NPOフォーラムのメンバーや館山市民など安房地域の住民が講師となって、それぞれの専門や得意分野、経験などについて講話をする茶話会である。



NPO知恵袋講座の内容

類型	内容	講師	日程
思い出・体験談	世界の海をめぐる元マグロ船機関長の話	吉田昌男(NPO 会員)	07年8月28日
	房州に伝わる「お舟唄」	利渉義宣(NPO 会員)	07年9月25日
	北下台と周辺のこと(東京水産大学の思い出)	利渉義宣(NPO 会員)	08年4月22日
	女性の目から見た戦時下の館山	下妻八重子(NPO 会員・元洲ノ崎海軍航空隊職員)	08年6月24日
	最後の4等水兵だった私	庄司兼次郎(NPO 会員)	09年1月27日
イランカラブテー～アイヌに生まれて	宇梶静江(NPO 会員・アイヌ古布絵作家)	09年5月26日	
履歴	安房の自然と樹木の治療	齊藤陽子(NPO 会員・安房生物愛好会「樹木医」)	09年3月24日
	布良の船大工とまちづくり	豊崎栄吉(NPO 会員・布良の船大工「船吉」四代目棟梁)	09年7月28日
	仏像制作を通して地域に生きる	池上藤夫(天台宗僧侶)	09年11月24日
	大企業技術者から見た暮らしと製品トラブル	沖山静彦(NPO 会員・元松下通信工業(株)本部品質技術部門/日本信頼性学会・故障物性研究会会員)	10年5月25日
研究	渡米アワビ漁師の地域調査	鈴木政和(NPO 会員・漁師だった15歳でソ連に拿捕されたという貴重な体験を持つ平和の語り部)	07年1月22日
	清国船「元順号」の千倉漂着と遭難救助	保坂明(NPO 会員・本人が船乗りだった時に人命救助をしていたことで江戸期の遭難船・清国「元順号」の研究	07年7月24日
	イワシ漁業の歩みと文化	平本紀久雄(NPO 会員・イワシ研究の水産学博士)	07年11月27日
	魚の立場で海を見る～マイワシ研究の自分史	平本紀久雄(NPO 会員・イワシ研究の水産学博士)	08年3月25日
	ヘリテージングツーリズム(近代化遺産のまちづくり)	天野努(NPO 会員・安房歴史文化研究会会長・元安房博物館長)	08年8月26日
	一式陸攻の最期/「元順号」と岩槻・千倉の交流	保坂 明(NPO 会員)	08年9月30日
	リン鉱産のアンガウル島とアジア太平洋戦争	田中房江(NPO 会員)	08年11月25日
	万石騒動・安房三義民300年	愛沢伸雄(NPO 代表)	10年3月23日
	韓国併合100年と館山	石渡延男(日韓教育実践研究会顧問・東洋大学講師)	10年4月27日
	安房の地域医療のあゆみ	梅園 忠(元安房医師会会長)	10年9月28日
	活動	「快鷹丸」遭難100年の韓国浦項訪問	愛沢伸雄(NPO 代表)
私の体験的平和・文化論「安房・平和のための美術展」(以下、「平和美術展」)		橋本芳久(NPO 会員)	08年5月27日
青木繁《海の幸》誕生の家と記念碑を保存する会		愛沢伸雄(NPO 代表)	08年10月29日
稲村城跡の保存運動と私		島田輝弥(NPO 会員・里見氏稲村城跡を保存する会事務局局長)	09年2月24日
青木繁《海の幸》から無言館まで		山口栄彦(NPO 会員・エッセイスト・布良出身でふるさとへの思いや「無言館」・窪島誠一郎主宰の関わりを語る)	09年6月24日
日韓平和まちづくり交流		浅井信(NPO 会員・元館山市観光プロデューサー)	09年8月25日
夢は実現させるもの		新屋敷孝(NPO 会員・佐多岬から宗谷岬までマラソン走破)	10年1月26日
館山市の文化財保護と財政		神田守隆(NPO 会員・前館山市議)	10年6月22日
かいた婦人の村のあゆみ		天羽道子(「かいた婦人の村」施設長)	10年7月27日
筆頭・立て直し人、その人生		石神正義(「立て直そう館山! 全市民の会」代表)	10年8月24日
趣味		山歩きのススメ・房総の山々	渡辺隆祥(NPO 会員)
	房総発見伝～わたしの年賀状	小沢義宣(NPO 会員)	09年4月28日
	北条海岸45年～漂着物・鳥・詩	船田正廣(NPO 会員)	09年10月27日

そのほかに、NPOフォーラムで主催した事業では、まちづくりの視点によって地域における各分野の現状を学び、話し合う場として、館山市民を対象とした「市民が主役のまちづくり」シンポジウム(2008年5月)や、富崎地区の住民を対象とした「元気なまちづくり市民講座」(2010年2月)などが開催されている。過去のことである「場所の記憶」における学習活動を手がかりに、まちづくりを意識しながら、地域の将来像を考えていこうとする姿勢が見られる。

なかでも地域医療の問題に関しては、地域の人びとの関心が高く情報共有が強く求められた分野であった。NPOフォーラムでは定年退職したメンバーが多く、近年の地域医療の課題だけでなく地域の医療文化についての掘り起こしに関わっていった。そのきっかけは、2008年に館山准看護学校、2009年に安房看護専門学校が閉校になったという緊急事態にあった。前述の「市民が主役のまちづくり」シンポジウムや「第2回元気なまちづくり市民講座」を通して、講座の参加者たちは地域医療が崩壊していく問題であることを強く実感することになる。すぐに、NPOフォーラムの愛沢代表や地域の医師・看護師という医療従事者を含む市民らによって「安房の地域医療を考える市民の会」が結成され、2008年11月には安房医師会とも協働して、医療従事者や市民らがともに話し合う場をつくり、地元新聞の地域医療問題の連載記事に関わった。そして、岩手県の沢内村での実際に取り組んだ地域医療を題材にした映画「いのちの山河」の上映会では、市民の関心が高く1,000名以上が来場した。その後に映画の主人公であった当時の医師を招いての地域医療問題のシンポジウムを開催した。

これらの取り組みは、地域づくり活動のなかでの医療という重要な地域課題とどう向き合っていくか、そのためには地域情報をどう共有して、安心して暮らせる健康な地域づくりが可能なのかを模索することになった。NPOフォーラムにとっては、新たな地域づくり活動を多くの人びとに普及していく契機にもなった。

2013年からは文化庁補助事業として、「ヘリテージまちづくり講座」が開かれ、広く市民対象文化遺産を保存・活用するための情報共有の場が広げられている。



「青木繁《海の幸》フォーラム」の様子



NPO知恵袋講座の様子(2012年4月)

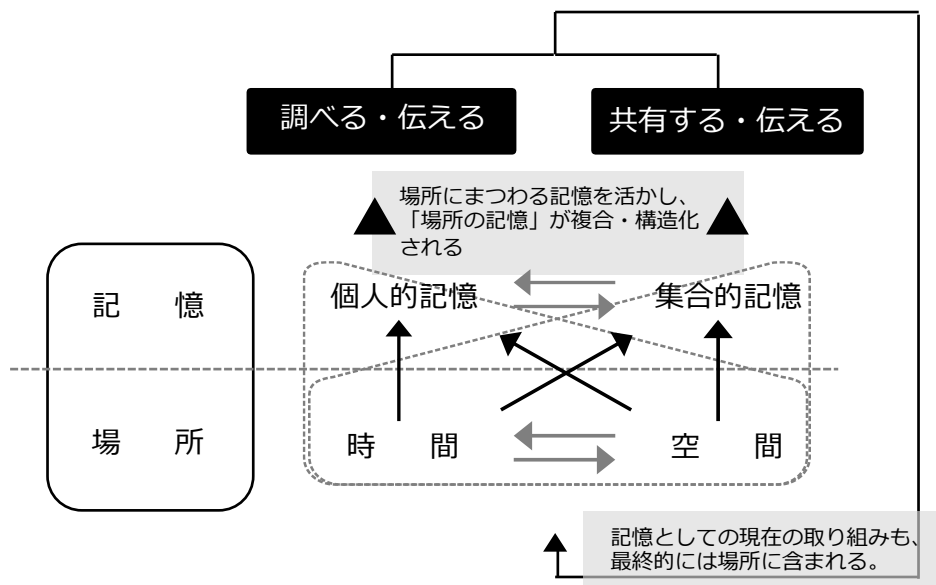
「元気なまちづくり市民講座」の内容

日程	講座内容	講師
08年5月31日	【シンポジウム】輝け館山!市民が主役のまちづくり	福留強・高野良裕・幸田右子 渡辺侑子・池田恵美子
08年8月06日	【ガイダンス】生涯学習でメシが食えるか～儲ける生涯学習のススメ	福留強
08年8月30日	【1】地域まるごと博物館	愛沢伸雄・鈴木政和
08年9月20日	【2】安心して暮らせる健康なまちを目ざして	高野良裕
08年10月25日	【3】マイナスをプラスと考える逆転の発想	矢野学
08年11月06日	【4】旅館立て直し太腕繁盛記	幸田右子・秋山準治
08年11月15日	【5】医師から見たエコロジー観光学	浅井信・大島博幸
08年12月7日	【6】青木繁《海の幸》を活かしたまちづくり	天野努
09年1月16日	【7】安房の食文化「おらがごっつお」とまちづくり	渡辺侑子
09年2月11日	【8】まちづくりワークショップ	福留強

7. 「場所の記憶」の1次的複合

単発的で主観的ともいわれる「場所の記憶」だが、以上のような調べ、伝え、共有する学習活動を通して線・面的な集合的記憶としてまとまることで、まちづくりや都市計画に活用できるようになる。ここでは集合的記憶としてまとまっていくことを複合という。

「場所の記憶」の複合を簡単に説明するとき、2つの捉え方がある。一つは大きく特定の「空間」に対して、一定の「時間」を共有する「通時的複合」である。もう一つは特定の「時間」に対して、一定の「空間」を共有する「共時的複合」である。前者の「通時的複合」は特定の建物などにおける「点」としての「通時的複合」と、そこからまちに拡大した「面」としての「通時的複合」に分けられる。そして、後者の「共時的複合」は特定の人物などにおける「点」としての「共時的複合」と、特定の出来事における「面」としての「共時的複合」に分けられる。



「場所の記憶」と「学習活動」との関係



複合の手順は取り組み体制によって異なるが、館山まるごと博物館では特定の出来事における「面」としての「共時的記憶」が主に行っており、ここではそれを「1次的複合」とする。

「館山まるごと博物館」というNPOフォーラムの取り組みは、地域にある戦争遺跡からアジア太平洋戦争を中心とした戦争の出来事を浮き彫りにしながら、地域から日本やアジアにつながっていく大きな歴史の流れやテーマに触れることができる。それは近現代の戦争時代や、中世から近世の房総里見氏、あるいは近代の日米交流や水産業・水産教育、さらには近世から近現代までの日中韓の様々な交流や、地域を訪れる文学者・画家など、その出来事の掘り起こしが深く掘り下げられ、同時に視野も広がっている。

地域で起こった出来事の調査研究を進め、その取り組みが展開していくなかで具体的な当時の姿やその実態が明らかになっていく。そのため地域住民のインタビューや現場への調査、またローカル専門家らとの連携などが図られて、各テーマに関連する地域遺産や地域史を調べ、それぞれ市民らに伝えていくための講演会やシンポジウム、あるいは展示会や冊子作成、さらには具体的に地域を見聞するウォーキングなどを企画し、NPO活動を通じての情報共有により、普及啓発する取り組みとなっていくのである。

なお、「館山まるごと博物館」を見ると、学習活動を通して出てきた証言や聞き取り活動などを積極的に活かしていることである。たとえば、戦時中の軍事的な地域資料がほとんど確認できない状態でも、地域との交流の機会を多くすることで、住民たちから直接聞き取っていく活動を重要な取り組みにしている。

## 8. 「場所の記憶」の2次的複合 ～ 「場所の記憶」の複合とローカル・キュレーターの展開

### (1) 「場所の記憶」の複合の類型及び取り組み

「場所の記憶」として見た場合、「館山まるごと博物館」では様々なテーマに基づいた「1次的複合」だけでなく、新しいつながりとして「2次的複合」が行われている。では「2次的複合」とは何か。大きく3つに分けて、それぞれを「通時的複合」、複数の出来事における「共時的複合」、「創発的複合」として見ていくことである。そこには地域間交流という「共時的複合」や、通時的時間的な「場所の記憶」と空間的な「場所の記憶」の間のつながりが見られる。ここではそれらのつながりごとにまとめてみる。

まず、「点」としての「通時的複合」としては、中世から近世にかけて築かれた館山城が時代によって異なる用途をつなぎあわせたことである。館山城は、戦時下において砲台や陣地などの軍事施設が置かれ、現在は市営公園として市民の憩いの場になっていることもあり、それらをつないだ学習活動を行っている。

また、「面」としての「通時的複合」としては、先ごろ館山市指定天然物になった樹齢数百年という「サイカチの木」の事例がある。この樹木は商店街の一角にあり、300年前の元禄地震の津波では木に登った人が助かったという伝承がある。それだけではなく、いざという時に葉が食用、実が洗剤・トゲが解毒剤になるという。商店街活性化のウォーキングガイドにおいて、「館山まるごと博物館」の重要ポイントの一つであり、先人たち知恵として伐らずに伝承され、今日の防災意識につながるように語り継がれてきたといえる。発展的に「サイカチの木を守る会」が発足し、2014年2月に館山市天然記念物に指定された。

次に一定空間的範囲の中での複数の出来事における「共時的複合」では、青木繁が滞在して絵画《海の幸》を描いた場所である小谷家住宅にまつわる時間的な「場所の記憶」の調査を契機として、明治以降、安房地域に滞在あるいは移住してきた画家や文学者などの住居や別荘にまつわる、時間的な「場所の記憶」へと広がっている事例である。もともと安房地域のエネルギー溢れる海の風景は当時の画家た



ちに知られ、明治時代にこの地を訪ねてくる画家たちについて調査研究しているローカル専門家は早くからいた。そこでNPOフォーラムは美術史的なことも学習活動や地域遺産として取り入れていくことになり、ローカル専門家らと協働して調査研究し、「館山まるごと博物館」に活用していった。

さらに、空間的範囲を超えた複数の出来事における「共時的複合」が行われることもあり、戦争と在米日本人をつなぎあわせたことが該当する。前述のように、アワビ漁を行っていた安房からの移住民たちが、アメリカの本土侵攻作戦計画「コロネット作戦」のための情報収集や占領軍の館山上陸に関わっていたと想定され、これらの出来事を通して、「戦後60年」を記念した日米交流シンポジウムを開催した。

最後に「創発的複合」としては、伝統的な織物技術を継承しているローカル専門家の発案で、地域に残る伝統的な織物と、網を作る漁師が編んでいたというセーターについて調査し、つなぎ合わせた事例である。公民館講座の中で、織物職人や漁師、水産業専門家というローカル専門家らを集め、織物という技術を通じて創作させてみるという試みであった。これは織物のローカル専門家が偶然発見した共通点から生まれたもので、NPOフォーラムではこの意義ある試みのコーディネートを積極的に支援した。これも「館山まるごと博物館」における「場所の記憶」の複合として位置づけることができる。

## (2) 「場所の記憶」の複合の意義

これまで述べてきた「場所の記憶」の複合に関する意義に照らし合わせてみると、まず、ダイナミックなストーリーによる展開が可能になった点がある。新しい視点をもった融合的な学問の誕生ともいえるもので、それは戦争の時代の出来事と渡米したアワビ漁師の出来事をつなぐことによって、地域史がよりダイナミックなものとなり世界史的なストーリーになったということである。

次に、様々な分野を横のつながりにして、新たなネットワークを形成していった点がある。「戦争60年」記念イベントとして開催された日米の民間交流史のシンポジウムは地域の平和イベントの一つであり、地域でおこなわれる様々な平和イベントと連携して「南房総平和フェスティバル2005～子どもたちに平和を渡そう」という新たなネットワークを実現した。なお、日米の民間交流史のシンポジウムでは、渡米したアワビ漁師の民間交流史にとどまらず、日米移民史や戦争時代の関わりなどの視点をもった調査研究ネットワークがつくられた。

さらに、文化財の保存・活用や地域文化と美術史的な取り組みのネットワークをつくった点である。画家が滞在した住宅で描いた絵画にまつわることで、その絵画が重要文化財という点だけではなく、住宅の存在を文化財にしたことを通じて、新たな視点をもって地域の文化や絵画に描かれている姿を見ていく。そこではNPOフォーラムを通じて、文化財や地域文化・美術史など各分野の研究者とローカル専門家がつながっていくことができた。このようなネットワークは、様々な新しい複合を創出し、らせん状に循環し、発展しているといえる。

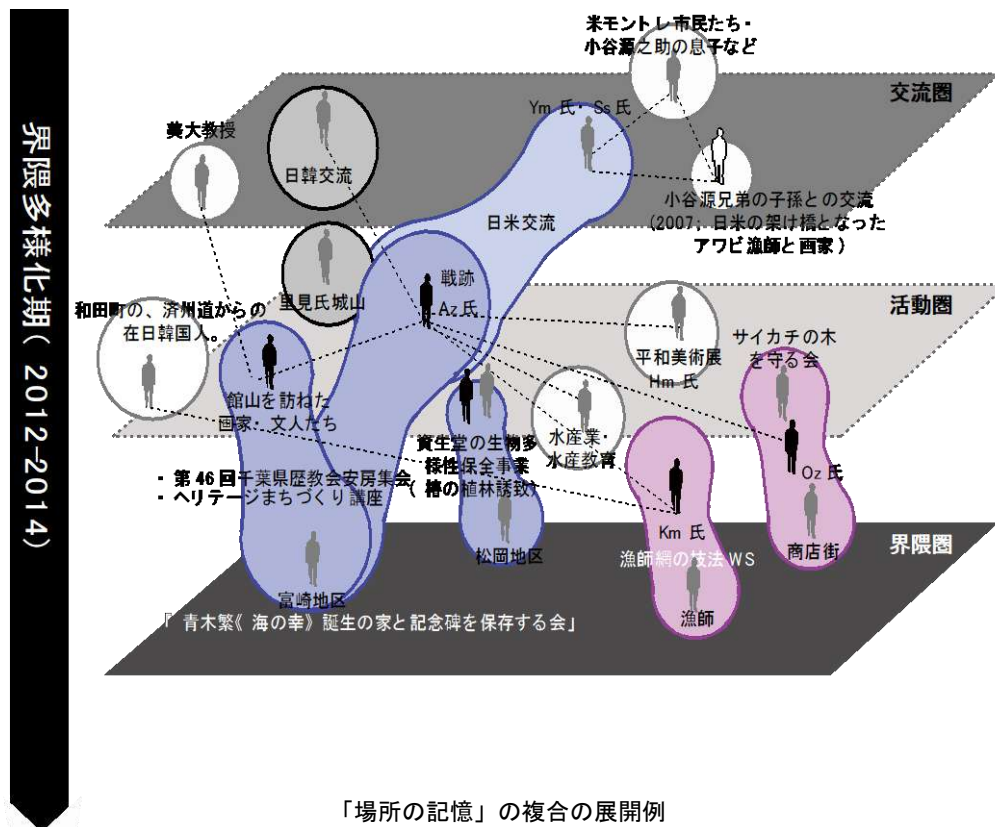
そして、すでに学習活動が行われた館山において、マイナス的なイメージをプラス的なものに変えながら、館山ならではの地域文脈を深めたことも重要な点である。その一つが戦争という出来事であり、地域の住民にとってマイナス的なイメージをもっているのを思い出したがるのが一般的ともいえるが、日米の民間交流という歴史的な出来事とつなぎ合わせることで、地域に住む聞き手にはこれまでにない新たな視点をもたせることができた事例であった。二つ目には織物職人が漁師たちから織物技術を習うことによって、地域の伝統的な織物に対する見方が深まった事例であった。

以上のような展開の中で、NPO活動に参加者たちの意識は転換し、新しい活動につながっている。それがさらなる新しい「場所の記憶」の複合へとつながっていることを指摘したい。複合に基づく取組

みは良い循環となり、「自己組織化」しているのである。このような展開におけるメカニズムは、「場所の記憶」の複合と共発的なまちづくりの関係性から生まれる。したがって、9. では複合と共発的なまちづくりの関係について検証を行う。

「場所の記憶」の複合の類型及び取り組み

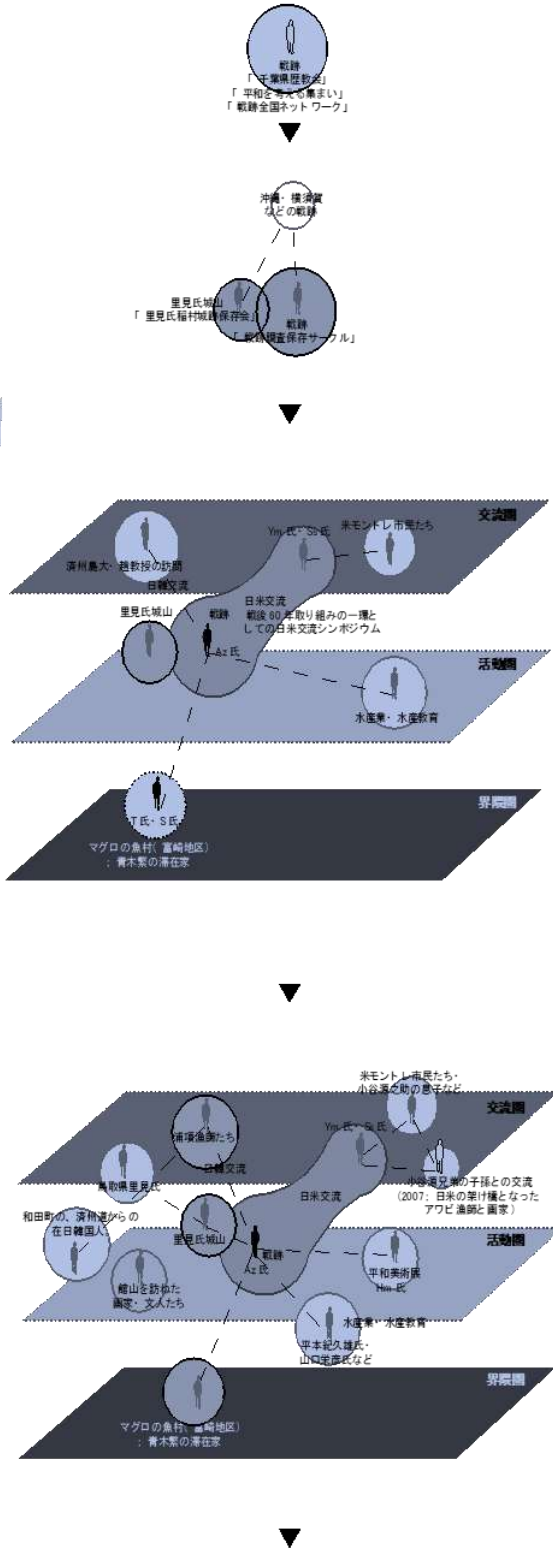
複合の類型	地域内	地域外
通時的複合	<ul style="list-style-type: none"> <li>■点としての通時的複合</li> <li>・館山城における築城当時と戦時下の用途</li> <li>■面としての通時的複合</li> <li>・津波(サイカチの木) + 商店街 = サイカチの木をテーマとした商店街ウォーキング</li> </ul>	-
共時的複合	<ul style="list-style-type: none"> <li>■一定範囲内での複数の出来事における共時的複合</li> <li>・青木繁《海の幸》+ 水産業(富崎地区) = 青木繁《海の幸》フォーラム「布良という聖地〜《海の幸》が生まれた場所」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■空間範囲を超えた複数の出来事における共時的複合</li> <li>・日米交流 + 戦争 = 「戦後 60 年」の取り組みの一環としての日米交流シンポジウム</li> </ul>
創発的複合	<ul style="list-style-type: none"> <li>■創発的複合</li> <li>・織物 + 漁師による服づくり = 織物ワークショップでの漁師による服づくり講座の実施予定</li> <li>→「もっと知りたい安房の海のこと」(水産業・日米交流・漁師の網作り)</li> </ul>	-



組織成立期 (1993-2004)

外的交流期 (2005-2006)

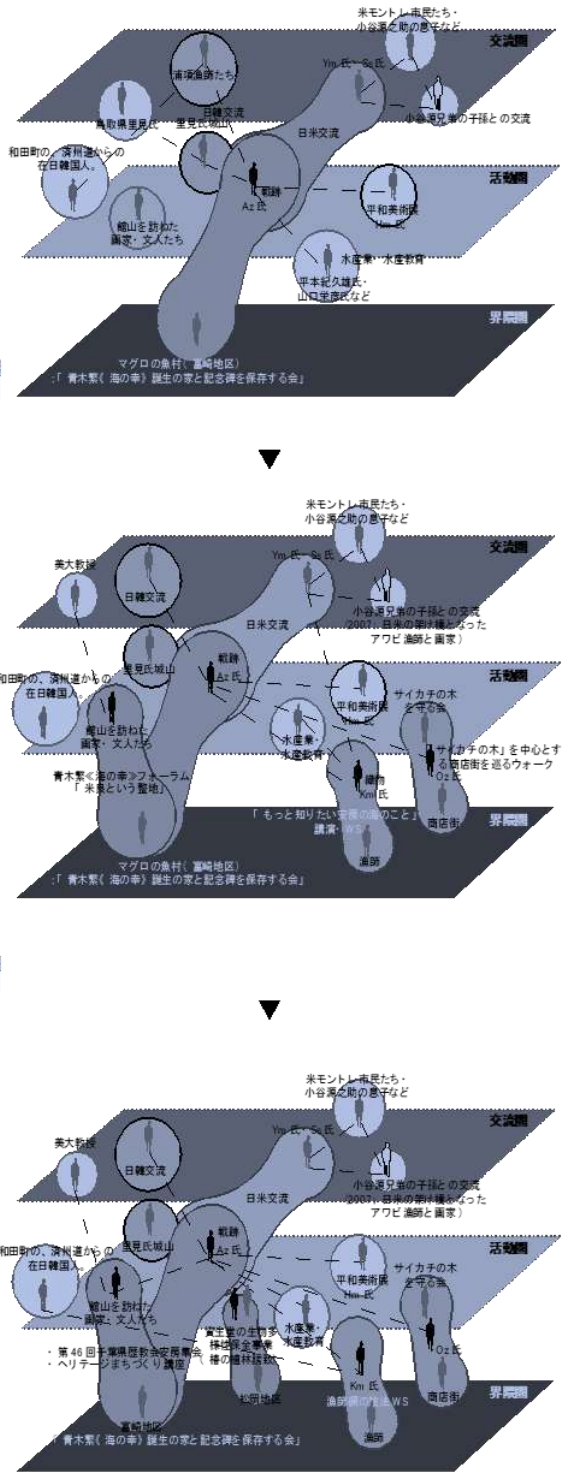
活動多様化期 (2007)



代表性成立期 (2008)

独立期 (2009-2011)

異質多様化期 (2012-2014)



■ 凡例	■ 学習活動の主体	■ 複合化
あるテーマにおけるグルーピング	実践者	第1世代のLGによる、「場所の記憶」の複合
別組織によるグルーピング	アクティベータ	第1世代のLGによる、新たな分野同士の「場所の記憶」の複合
..... 同じテーマ同士の連携・サポート	ローカル・キュレーター	第2世代のLGによる、「場所の記憶」の複合

「場所の記憶」の複合における展開プロセス



## 9. 「場所の記憶」の複合と共発的なまちづくりとの関係性

「場所の記憶」のアーカイブ化や「場所の記憶」の複合というエコミュージアムでの取り組みは、地域内外での生態的な体制を持つ「共発的なまちづくり」とお互いつながっている。その一環として、①参加者の展開プロセス ②地域内外とのネットワーク ③ローカルキュレーター（一つの分野だけでなく、地域全体を視野に入れながら、動かしていく人）という3つの大きな観点から「場所の記憶」の複合と「共発的なまちづくり」との関係性を明らかにしたい。

### (1) 共発的なまちづくりの展開

#### A. 「場所の記憶」の複合に基づくネットワーク

「場所の記憶」の複合に基づき、様々なネットワークが行われてきた。まず、年代ごとの学習活動における組織間のネットワークを示してみると下表のようになる。主な特徴としては、各取り組みやテーマごとに関連組織や人のなかで、ネットワークが形成されていることである。各分野の専門家やローカル専門家、あるいは地域ですでに取り組んでいる市民や団体など関わっている主体が様々にある。

#### 出来事ごとに関連する団体や人物

- 戦争と平和＝千葉県歴教協、戦争遺跡保存全国ネットワーク、かにた婦人の村、安房母親大会実行委員会、「安房・平和のための美術展」実行委員会、NGOウガンダ意識向上財団（CUFI）、山口栄彦、庄司兼次郎、山井廣、河野宏明、鈴木政和、小沢義宣
- 里見氏の歴史文化＝里見氏稲村城跡を保存する会（2012年解散）、千葉城郭研究会、千葉歴史学会、全国里見一族交流会、房総里見会、劇団員の火、滝川恒昭、遠山成一、島田輝弥、石崎和夫
- 日米交流＝「虹のかけ橋」実行委員会、溝口かおり、鈴木政和、山口正明、日系移民の子孫たち、米国の歴史学者たち、
- 水産業・水産教育＝豊津会（2003年解散）、楽水会、平本紀久雄、大場俊雄、利渉義宣、豊崎栄吉、山口正明
- 日中韓交流＝日韓教育実践研究会、日中韓青少年歴史体験キャンプ実行委員会、大巖院、石渡延男、三橋広夫、浅井信
- 青木繁が滞在した小谷家住宅と富崎地区＝青木繁《海の幸》誕生の家と記念碑を保存する会、NPO法人青木繁「海の幸」会、富崎地区コミュニティ委員会、小谷家当主、石橋財団石橋美術館・ブリヂストン美術館、船田正廣

特徴的なことは、NPOフォーラムの会員たちの「アクティベーター化」によって、独自のテーマでの学習活動に広がりが見られる。「アクティベーター」とは、あるテーマに対する学習活動を主体的に企画する役割をもった仕掛け人のことである。この事例を挙げると、地域の美術家たちが平和を願っておこなうチャリティー絵画展「安房・平和のための美術展」に関するものであったり、渡米した房総アワビ漁師の民間交流史に関する調査研究や交流イベント、あるいは青木繁《海の幸》という絵画と小谷家住宅の保存活用を通じての富崎地区の活性化の青木保存会活動などである。それぞれのテーマをもつての地域づくり活動としてNPOフォーラムが設立してからは、それぞれの分野の会員の動きやネットワークの広がりがあったことで、新たな展開が生まれるような事業計画を毎年つくって実施している。

なかでもNPOフォーラムが長年取り組んできた「里見ウォーキング」をもとにしたものが、2008年の「ちばDC（デスティネーション）」キャンペーンで行われた館山市観光協会主催の「駅からハイキン

グ」であり、それまでにNPOフォーラムと稲村保存会が協働しての活動実績があったことで開催できた。これらの動きはネットワークが新たな地域づくりに展開していった事例といえる。

さらに挙げるならば、全国各地との交流や連携が多く見られるようになった。前述してきた稲村保存会の活動との協働事業では、NPOフォーラムが設立されたことで、地元行政や諸団体と連携が確実なものとなり、里見氏の歴史文化を通じて他地域との交流が広がっていった。2001年に開催された「南総発見フォーラム」では、千葉県知事をはじめ里見氏ゆかりの地の館山市・鳥取県倉吉市・群馬県高崎市3市の首長や教育長が出席して「里見サミット」を行ったことに端を発している。その後、3市の市民団体やNPO法人が中心となって「里見ネットワーク交流」を継続的に行っている。

## B. 「場所の記憶」の複合におけるまちづくりの展開プロセス

では、「場所の記憶」の複合における展開プロセスのように、①テーマ型組織による活動圏、②地縁組織による界限圏、③地域外の組織とのネットワークによる交流圏、という3つのレイヤー（階層）に分けて、「場所の記憶」の複合と「共発的なまちづくり」の展開について分析してみる。

まず、戦跡における取り組みが複合を通して徐々に拡大し、地域外の組織との交流が起きている。その一つが、2005年の戦跡と日米交流との間における複合により、「戦後60年」にアメリカの市民グループとの交流イベントが実施され、あるいは安房を支配していた里見家が徳川幕府によって伯耆国(鳥取県倉吉市)へ国替えされたことをもとに鳥取県の市民団体と交流してきたことである。そのような展開になったのは、戦争における「場所の記憶」に基づいたエコミュージアム活動がベースとなって、つなぎあわせ役になったからである。さらに2008年に青木保存会が結成され、初めて地元の地縁型組織との連携体制ができた。つまり界限圏とつながることで、富崎地区における代表性が生まれたといえる。

一方、第3者として新しいローカルキュレーター（一つの分野だけでなく、地域全体を視野に入れながら、動かしていく人）による複合が起きている。

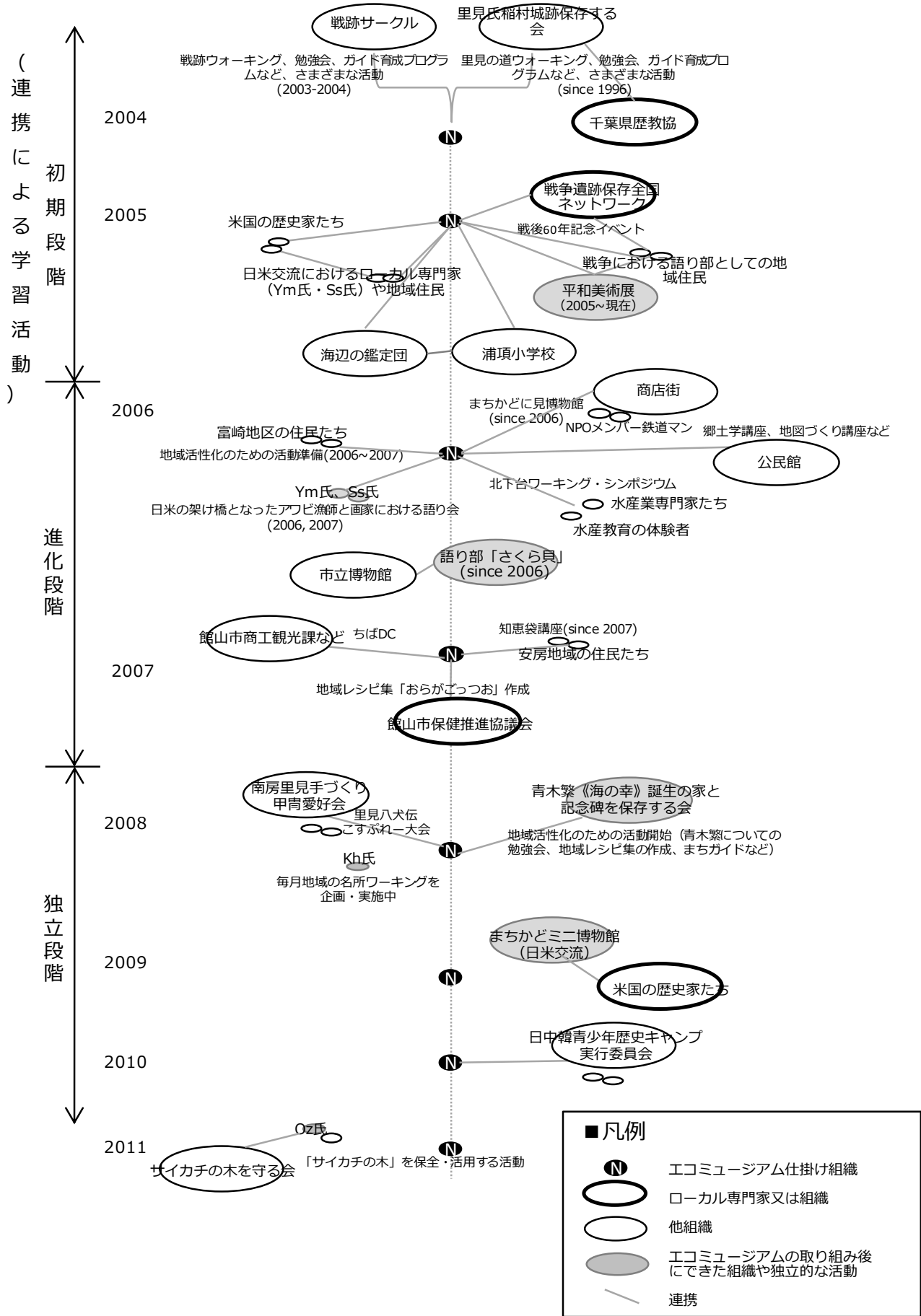


2005年「日米交流」イベント



「青木繁《海の幸》誕生の家と記念碑を保存する会」HP





学習活動における組織間プロセスおよび学習活動を通して育まれたローカル専門家による活動

## NPOフォーラムと他組織との連携活動

西暦	共催・後援・協働	連携内容
2004	・館山市・館山市観光協会・稲村保存会	・里見ウォーキング
	・かいた婦人の村	・施設内にある戦跡の整備と見学案内 ・バザーの手伝い
	・戦争遺跡保存全国ネットワーク・館山市など	・第8回戦争遺跡保存全国シンポジウム館山大会
2005	・韓国浦項製鉄西初等学校・国交省・館山市など	・日韓子ども交流 in 館山
	・米モントレー有志・館山ユネスコ協会・館山音楽鑑賞協会・オーシャンクイーン・千葉県・館山市など	・虹のかけ橋〜ウミホテルとアワビがむすぶ日米交流
2006	・千葉県教委・館山市など	・近代水産業の発展に貢献した人びとの足跡
2007	・館山市観光協会・館山市商工観光課・商店街	・JR 東日本ちばDC(デスティネーション)キャンペーン
	・たてやま海辺のまちづくり研究会・館山市など	・日米の架け橋となったアワビ漁師と画家
	・安房地域母親大会・館山市など	・映画『赤い鯨と白い蛇』上映会
	・館山市保健推進協議会など	・安房の食文化研究「おらがごっつお」レシピ集制作
	・ウミホテル合唱団・安房	・NPOフォーラム主宰の合唱団
2008	・NPO全国生涯学習まちづくり協会など	・元気なまちづくり市民講座
	・富崎地区コミュニティ委員会・全国の画家や美術関係者など	・青木繁《海の幸》誕生の家と記念碑を保存する会結成
	・安房医師会(医師や看護婦)、市民など	・地域医療の危機と看護学校問題を考える市民の集い
	・安房高校 JRC 部・館山病院など	・ウガンダ支援バザー
	・館山市観光協会・南総里見手づくり甲冑愛好会 ・館山市など	・戦国こすぶれ大会〜八犬伝ワールド
2009	・安房医師会など	・安房の地域医療を考える市民の集い
	・国交省・青木保存会	・漁村が誇る3つの“あ”のまちづくり
2010	・富崎地区コミュニティ委員会、青木保存会	・元気なまちづくり市民講座
	・安房の地域医療を考える市民の会	・癒しの海辺のまちづくりシンポジウム
	・館山市社会福祉協議会など	・第9回日中韓青少年歴史体験キャンプ
	・日中韓青少年歴史体験キャンプ実行委員会 ・千葉県、館山市、南房総市、教委など	
2011	・安房医療ネット、花の谷クリニック	・安房医療介護福祉連携・東日本大震災支援の会

### (2) エコミュージアムに関わった参加者の展開プロセス

「場所の記憶」のアーカイブ化や「場所の記憶」の複合の取り組みに関わっている参加者は、徐々に自分の記憶から地域の記憶まで接して、地域への帰属感や新しい活動へのインスピレーションなどを受け取るようになる。ここでは参加者の展開プロセスについて見てみる。

#### A. 様々な分野におけるローカル専門家やテーマ型組織との連携

各テーマに取り組んでいる「館山まるごと博物館」では、関連する出来事のローカル専門家やテーマ型組織との連携を通じて進められてきた。戦争や里見氏に関することは保存運動のなかでの様々なイベントや学習活動が取り組まれたことで参加者の意識を高めていった。しかし、日米交流や水産業・水産教育、あるいは安房地域を訪ねてきた画家などの取り組みは、ローカル専門家やテーマ型組織との連携で進められてきた。

#### B. 参加者の展開プロセス

エコミュージアムに関わっていく人びとの育成や展開プロセスには、①仕掛けの段階である初期段階と、②より積極的に関わっていく進化段階、③アクティベーター（テーマに対する学習活動を主体的に企画する役割をもった仕掛け人）として独立的に活動していく独立段階、と大きく3つに分けることができる。

変化がほとんど見られない①の初期段階は除いて、参加者のなかで変化が見られていく②の進化段階

から捉えると「聞き手」から「実践者」へ、また「話し手」から「実践者」への展開がある。前者はNPOフォーラムを中心とした学習活動、すなわち館山市民を対象とするガイドツアーや市民講座などに参加した「聞き手」が「実践者」として実際に取り組むことである。ほとんどのNPOフォーラムの会員たちはここに当てはまる。後者は、自分の体験を伝える大切さや地域との関わりを通じて、「実践者」やアクティベーターへと展開していくことである。地域の出来事や伝承を独自に構成した物語を語っている市民グループ「語り部さくら貝」の取り組みなどはこれに該当している。自分が直接・間接に関わってきた生活の場という「場所の記憶」を掘り起こし、臨場感ある学習活動に関わるプロセスのなかで、自分や地域への誇りをもち興味・関心を高めていく現象であると説明できる。

長期間の学習活動に関わることで、独立的な取り組みとなっていく③の独立段階である。学習活動に取り組んだ「実践者」たちは、「まちかどミニ博物館」や「里見ウォーキング」のガイド活動、青木保存会を支えている活動に取り組んできたアクティベーターといえる。ただ「聞き手」からすぐにアクティベーターへと展開していった事例に「安房・平和のための美術展」の取り組みがある。

「館山まるごと博物館」は、独自の学習活動が直後からあった山形県の「朝日町エコミュージアム」と比べると、行政と一体になって取り組んできた地区住民が母体となっている事例とは異なり、市民一人ひとりが自分なりの特技や個性を活かしたNPO活動として展開してきたことの意義は大きい。

### C. 積極的なサポート

「館山まるごと博物館」で活躍する市民らが実践的なアクティベーターとなる展開においては、NPOフォーラムからの積極的なサポート体制が大きな要因であると考えられる。会員には趣味や職種などの特技を活かした活動に対して、積極的にノウハウやネットワークを提供して自発的な、「実践者」になるように促している。「安房・平和のための美術展」や「まちかどミニ博物館」などはその実例として挙げられる。また、水産業の衰退に伴い市内でも最も少子高齢化が進む富崎地区では、地域の活性化のために、地縁型テーマ型組織である青木保存会の設立を呼びかけた。実務はNPOフォーラムが事務局を担い、《海の幸》誕生の背景となった漁労技術や舟歌「安房節」や漁村の食文化、祭礼、神話などの生活文化全般に着目する学習活動に、一人ひとりが参加しやすいようにまちづくり活動を進めていった。

さらには間接的な影響としては、NPOフォーラムを中心とする長年の調査研究、ガイドや学習活動に参加しながら、NPOフォーラムが企画する各種イベントに関わっていった経験は大きい。そこには学習活動における「調べる」「伝える」「共有する」、さらには「場所の記憶」を「複合する」能力が育まれ、別の形として活かされるようになる仕掛けともいえる。

そして、アクティベーターがローカル・キュレーター（一つの分野だけでなく、地域全体を視野に入れながら動かしていく人）として展開していく段階は、前述した独立段階とほぼ重なっている。

### D. 柔軟な役割・テーマの移動

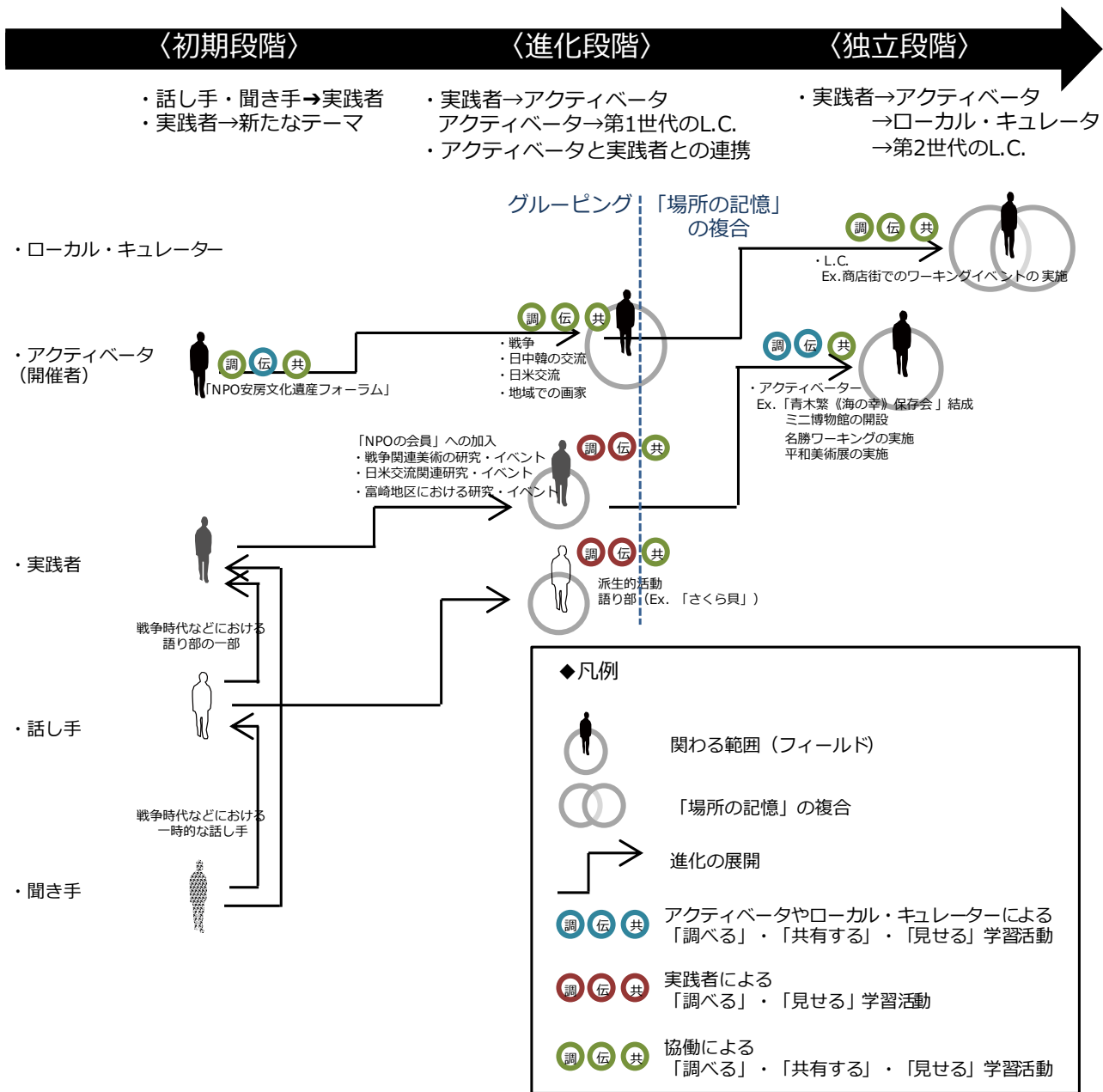
地域の生活者として関わることによって、役割の移動が見られることがある。たとえば、何かの学習活動に「聞き手」として参加していた人でも、戦跡学習の場では戦争体験を語る「話し手」に転化することがある。あるいは、戦争体験を語っていた人が、他の話題のときに自分が詳しく知っている内容になると、再び「話し手」になる。いつも戦争体験の「話し手」であったNPOフォーラムの会員が、実は水産大学の出身であったことから、漁労をテーマとした「話し手」となり、あるいは漁村史の調査においてはアドバイザーとして活躍するなど、学習活動のテーマや役割が移動していくのである。

このような役割の移動が起きる理由として、「生活圏」を共有していることで共通の「ローカルな知」があるからである。とくに館山の場合は多くの住民たちが、地域にある軍事施設から戦争という大きな

出来事を子ども時代に見聞しており、従軍体験の証言よりも大きな要素となることがある。何かを教育されていたという感覚ではなく、それぞれの能力を認め合い、発揮できる場づくりが形成されていたからと推察している。

NPOフォーラムでは、地域住民が自分で調査研究していることや、日頃の特技や趣味などについて気軽に発表する「NPO知恵袋講座」を定期的で開催している。「聞き手」だった人でも自分なりのテーマを見つけて報告することで、特技や趣味を通じてNPO活動に活かされ、新たな展開のきっかけとなっている。お互いの「ローカルな知」を分かち合うことによって、コミュニティの一員として人間関係が良好になり、新たなネットワークの一助になると考えられる。

このように、館山のまちの歩みや安房地域の歴史文化、なかでも近現代史に関することを、これまで体系的に調査研究されてきたことはあまりない。この間、青木繁が滞在した小谷家住宅から明治期以降の漁村資料が大量に発見され、近代水産業や殖産興業などの発展を読み解く調査・学習活動が続いている。館山市立博物館や図書館との連携により、ローカル専門家が育ちつつある。



「場所の記憶」の複合における参加者の展開プロセス

### (3) ローカル・キュレーターの展開プロセス

#### A. 複合の必然性を生む要因

「館山まるごと博物館」における「場所の記憶」の複合は、地域であった出来事の間をつなぎあわせることによって生まれたものである。戦争のみではなく常に地域における出来事についても目を開いて、ローカル専門家などとの交流によって、広範囲に渡る学習活動やサポート活動になっていったことがその必然性をつくっていったと考えられる。

ローカル・キュレーターであるNPOフォーラムの愛沢代表は、これまで地域における近現代の戦跡や中世の里見氏城跡という時間的な場所と、それにまつわる様々な場所やつながりを見だし、新たな学習活動をつくって、地域遺産の保存・活用のために地道な活動を継続してきた。特に世界史の教師であったため、足もとの地域のことが世界にどのようなつながりや意義があるかを見極めていく洞察力があったのであろう。それだけではなく専門家でも解釈が難しい戦跡などを、市民らとともに協働して学んでいく開放的な姿勢を示した。また様々な分野のローカル専門家との持続的な交流をはじめ、見つけ出したものに関して再び徹底的な調査研究を進め、さらに関連するローカル専門家との連携を積極的に進めたことが「館山まるごと博物館」の取り組みに大きな成果をもたらしているといえる。

#### B. ローカル・キュレーターの展開プロセス

実践者からアクティベーターとなり、そのアクティベーターとして学習活動の蓄積を積んできた愛沢氏は、ローカル・キュレーターとして挙げられる。その経緯をみると、一時的な学習活動ではなく、地域での主体的で持続的な学習活動のプロセスを通じてローカル・キュレーターになっていったといえる。

「場所の記憶」の複合が持続していくためには、第2世代のローカル・キュレーターの展開を見るべきである。館山の場合は、第2世代のローカル・キュレーターとしてNPOフォーラムのメンバーに見られる。たとえば、商店街をめぐる店主の話聞きながら、「まちかどミニ博物館」をめぐるウォーキングを実施したメンバーは、もともと地域づくりや商店街の再生を構想することが好きでアイデアマンでもある。それとともに2003年より愛沢代表が講師であった公民館講座の学習活動に参加したことで、戦跡や地域の歴史文化を学ぶ楽しさ、あるいは地域づくり活動の大切さを知ったという。すなわちエコミュージアムの学習活動のなかで、地域全体の構想を考えるとともに、いろいろな分野に興味・関心を持って、様々なアイデアを出しては実践してきた。地域づくり活動を好む性格の持ち主であったからこそローカル・キュレーターとしての展開が可能だったと考えられる。

アクティベーターとして活躍している取り組みには、時として偶然的な複合が起きるものもあり、自分のキャリアや興味・関心分野を活かす程度を脱却して、地域全体から見て広範囲に様々なものをつなぎあわせていこうとする積極的な視点をもつことで創造性が生まれてくると思われる。ここでの創造性とは、ゼロから創り出すのではなく、地域や場所にあるものを手掛かりにして、新たにつなぎ合わせていく能力のことを指している



「あわがいど」のメンバーたち

#### (4) 空間づくりへの展開

地域の代表的な文化財や物語ではなく、歴史文化とともに日常の生活や風景、あるいは歴史的建造物など、そこにある空間を守り活かしていくことは、地域の中での複数の利害関係など、その位置づけによって課題は多い。そこでエコミュージアムの取り組みを活かす「共発的なまちづくり」の一環として行われている建造物の保存や活用、あるいは空間的なまちづくりへの展開についてまとめてみる。

##### A. 建造物の保存・活用

一般に私有財産である建物を保存していくためには、その建物が地域に存在する意義を位置づけ、地域住民たちに示しながら保存・活用の意義を伝えていく必要がある。「場所の記憶」の複合による総括的な地域の「文脈づくり」や、地域内外とのまちづくりの取り組みを知り理解することで、特定の場所とのまちづくりとの関連が明らかになると、その建物を保存・活用しようという動きになる場合がある。

##### (a) まちかどミニ博物館～渡米したアワビ移民の資料館

NPOフォーラム副代表の鈴木政和氏は、自分の住む集落から明治期にアメリカのモントレイに渡った器械式潜水のアワビ漁師たちについて調査研究した成果を、所有する空き店舗に資料パネル展示して、週末に開館している。この取り組みはNPO活動にある「まちかどミニ博物館」の一つとして進められている。

##### (b) 青木繁が滞在して《海の幸》を制作した富崎・布良の小谷家住宅

2005年、富崎地区連合区長会長吉田氏からNPOフォーラムの愛沢代表と池田事務局長に青木繁を核とした地域活性化への協力要請があったことを機に、漁村のまちづくり活動が始まった。当初は、没後50年に建立された記念碑を保存するという取り組みであったが、前述のように、小谷家住宅の当主から、地域活性化のために保存・活用することへの積極的発言があった。様々な経緯を経て館山市指定文化財となった小谷家住宅の保存・活用を目的として、地元では富崎地区コミュニティ委員会を中心に2008年に青木保存会を結成し、翌年、全国の画家らはNPO法人青木繁「海の幸」会を発足した。ともに募金活動を展開するなか、2012年4月に「館山市ふるさと納税（寄付）制度」を整備し、「小谷家住宅の保存及び活用の支援に関する事業」を指定して寄付ができるように位置づけて、行政支援の仕組みが確立した。修復と公開に向けて小谷家当主・青木保存会・NPO青木繁「海の幸」会・館山市教育委員会は、定期的に四者協議会を開催して、協働で取り組んでいる。その結果、総事業費は3600万円のところ2013年度までに約2,000万円が集まり、館山市も小谷家住宅修復を2ヶ年事業としての補助金が決定し、2014年4月に着工の運びとなった。

このような中で、小谷家住宅と青木繁『海の幸』ゆかりの漁村が、歴史的文化的に重要な役割をもっていたことが分かってきたが、さらに調査研究をさらに深めて、住宅公開時には、その成果を展示していきたいとのことである。

##### (c) その他

地域における近代の歴史的建物や空き店舗などにも着目し、保存・活用の取り組みに関わっている。大正期の銀行建物である小高記念館は、所有者の逝去後10年間使われていなかったところ、NPOフォーラムの文化交流の拠点として活用されたことから、息が吹き込まれ蘇った。教育委員会では、国登録文化財候補として申請予定だと聞いている。また、築160年になる小原家住宅は、2005年制作の映画『赤い鯨と白い蛇』の撮影場所であり、世界的研究者だった先代が多数品種改良したツバキの広い庭園がある。当主はNPOフォーラム会員であり、懇親会や見学会などに庭園を開放している。今後、小原家住宅のでも、国登録文化財にしていくことを視野に入れつつ、保存・活用を検討している。

## B. 空間まちづくりへの展開

### (a) 青木繁ゆかりの富崎地区の活性化事業

繰り返し述べてきたように、小谷家住宅の保存や富崎地区の活性化を目ざして、様々な取り組みを行っている。NPOフォーラムが事務局を担う青木保存会では、学習活動を通じて①青木繁が滞在した小谷家住宅や《海の幸》記念碑の保存・活用の調査研究と実践（イベント、ガイドなど）、②漁村集落の生活文化における調査研究や記録伝承（舟歌の「安房節」、語り部など）、③地域の食文化における調査研究や商品開発（レシピ作成など）を取り上げてきた。

また、統廃合により休校中の富崎小学校の空き校舎を活用し、小谷家住宅の保存・活用と連動しながら芸術文化を活かす活用方法を模索している。青木保存会では、2013年春に交流のあった東京の劇団「歌舞人(かぶと)」の稽古合宿の場として、空き校舎利用を提案し、教育委員会から利用の許可がおりた。1週間の期間中、地元住民たちが差し入れなどで歓迎したという。合宿の最終日には劇団がお礼と交流を兼ねてミュージカル『アラジン』を上演し、多数の住民が会場の体育館で楽しんだ。

### (b) 福原有信ゆかりの松岡区の活性化事業

富崎地区に隣接した松岡区では、同地出身である資生堂を創業した「福原有信を語り継ぐ会」を発足させた。2013年2月、NPOフォーラムと共催して「館山ふるさとの偉人・福原有信を語るつどい」を開催した。現地見学会やシンポジウムに多数の市民が参加した。講演では資生堂関係者が創業者福原有信の功績や起業精神と今日に続く企業理念や社会貢献事業について紹介があった。パネルディスカッションは松岡区民がふるさとの歴史・文化や風土を紹介し、偉人である福原有信を通じて地域活性化への想いを語った。奇しくも館山市の木は資生堂のロゴマークと同じ椿であり、同社は生物多様性の保全事業として「椿の森プロジェクト」を展開していることから、松岡区では植林活動を呼びかけ「椿の里」にしたいという発言があった。

なお、松岡八幡神社には福原有信が奉納した明治44年の鳥居があり、関東厄除け三大師の一つである遍智院小塚大師は、「福原之墓」があり福原家の菩提寺であった。松岡八幡神社の裏山は、航海安全を祈願する金毘羅山で、古くから富崎地区の漁師たちの信仰の対象であった。「館山まるごと博物館」の面的な地域遺産がさらに広がりつつある。東京都中央区の小塚大師研究会は、福原没後90年の2014年3月30日の命日に遍智院小塚大師と「福原之墓」を訪れ、館山市民との交流を行う。

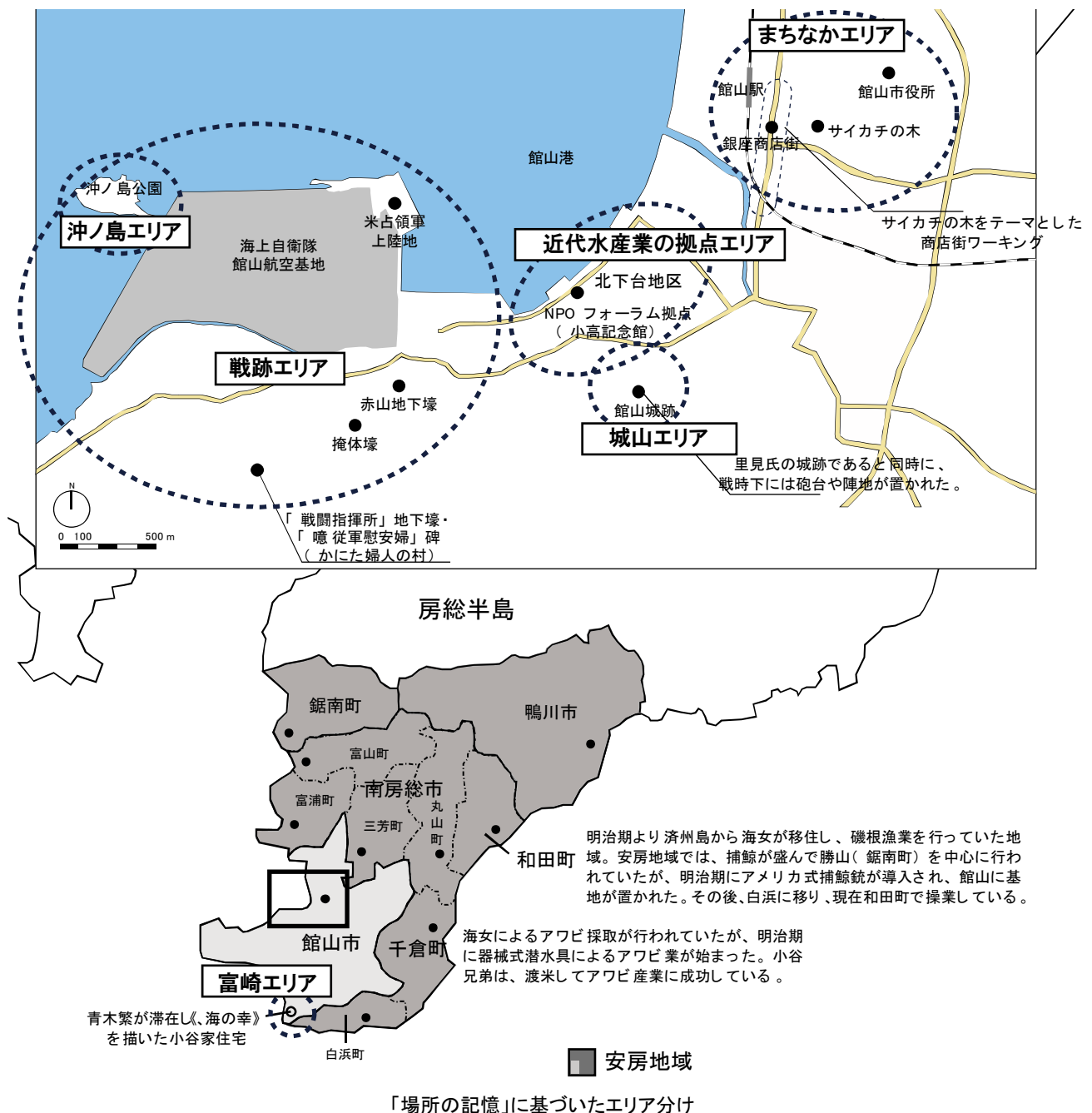
### (c) 「場所の記憶」に基づいたエリア分け及び設定

NPOフォーラムでは、市内をテーマや地域の特性に基づき5つのエリアに分けて、それぞれの特性を学べるガイドブック『海とともに生きるまち』を編集・発行している。このエリア分けは、毎年実施してきた10キロほどの「里見ウォーキング」コースづくりから発展してきたものである。

また、富崎地区の地域活性化事業の一環として漁村集落景観の美術的な検証を行うなど、漁村にふさわしいウォーキングコースやそのためのサインボードの設置などハード面への取り組みも行っている。

もちろん、これだけでは、都市計画としてのまちづくりに直接関係あるものにはならない。しかし、このような「場所の記憶」の複合に基づいた新たなエリアの設定は、地域づくりへの新たな手法として示唆に富んでいると考えられる。





### C. アドバイザーとしてのまちづくり活動

「国指定史跡」になった稲村城跡の整備事業にはNPOフォーラムの愛沢代表が館山市民代表として委員に委嘱されている。「里見氏城跡群」として指定を受けたため、他の城跡も順次追加指定になっていく可能性があり、館山城跡などについても「国指定」史跡化を呼びかけていくとのことである。また、戦跡についても「市指定」史跡が赤山地下壕跡だけであり、掩体壕やアメリカ軍上陸地、さらには館山海軍砲術学校の烹炊所などを史跡にして保存・活用を求められている。

これまでNPOフォーラムでは、館山市の観光立市施策や文化財行政の中において、必要に応じ館山市企画課や商工観光課、あるいは教育委員会生涯学習課などと協働事業を進めてきた。これまでの活動が認められ、2011年にNPOフォーラム愛沢代表は、市民の立場から館山市観光協会の理事に選ばれている。調査研究のデータやノウハウの蓄積に基づく教育観光の実績など地域づくりのアドバイザー的な役割が期待されている。

## 10. まとめ

「館山まるごと博物館」の取り組みについて、まちづくりとして検証を行ったところ、以下の4つにまとめられる。

### (1) 多様な手がかりづくり：「場所の記憶」におけるアーカイブ取り組み

地域というのはいくつものレイヤー（階層）によって成立しており（成層性）、お互いに密接的につながったり重なったりしている（重層性）。そのため地域の特性を明らかにするためには、成層的で重層的な無数の「場所の記憶」を掘りさげていく必要がある。「館山まるごと博物館」では、近現代における戦争時代の出来事や中世から近世までの里見氏の歴史、あるいは漁労や水産教育、海を通じた国内外の交流、館山で描かれた文学や芸術、転地療養や殖産興業など、様々な「場所の記憶」がアーカイブ化された取り組みになっている。

### (2) 「場所の記憶」における様々な複合と地域内外との交流

様々な「場所の記憶」の複合を通じたアーカイブ活動だけではなく、建造物の保存・活用、地域内外との交流などへとつながっている。青木繁《海の幸》と布良崎神社の神輿をつないだ複合を通じた小谷家と神輿世話人の交流や、戦争と日米移住の出来事をつなぐ複合を通じた日米交流の取組みなど、その展開は様々である。

そこでは、柔軟で大胆な歴史的想像力によりそれぞれの出来事をつなぎ合わせることで、創発的な「場所の記憶」の複合が次々と起き、多くの団体や専門家との交流やネットワークの創出につながっている。同時に、NPOフォーラムの会員であるローカル専門家や地域内外の専門家、諸団体にも広く情報を共有し、共通するテーマをもつネットワークでの交流や連携を図り、調査研究が深められるよう工夫されることで、地域内や周辺地域のみに留まらず様々な交流による共発的なまちづくりに展開できた。

### (3) ローカル・キュレーターへの展開と地域での連携体制

学習活動に参加したことで「場所の記憶」での取り組みに共感し、個人的ではあっても自分の特技を活かして独立した活動をおこなうようになっていた。また、一つの分野だけでなく、地域全体を視野に入れながら動かしていく人のことを、ローカル・キュレーターと呼び、NPOフォーラムの愛沢氏や池田氏を第1世代ローカル・キュレーターとすると、今新たに第2世代ローカル・キュレーターが会員の中から生まれてきている。「館山まるごと博物館」においても生態的な機能が形成されつつあるということである。

このような展開の中で、青木保存会のような地縁型の組織が結成されるまでに至った。区長会などの組織とは違った任意の団体ではあっても地域の意見を代表する組織ともいえる。このような地域との連携体制が形成できたのは、「共発的なまちづくり」を念頭に置き、NPOフォーラムが事務局を担うことで地域コミュニティの弱点を補ってきたからである。多様なまちづくり講座を通じて、NPOフォーラムが総括的で持続的な取り組みである「館山まるごと博物館」を示してきた意義は大きい。

### (4) 地域文脈に基づいた地域づくり

「場所の記憶」の複合を通じ地域全体の「文脈」が見えつつあり、さらに地域文脈に基づいた地域づくりも進められている。「海とともに生きてきた『平和・交流・共生』のまち・館山」という理念のもとで、地域における様々な「場所の記憶」に基づいた検証や交流の取り組みが実施されている。

その実践的な姿が、NPOフォーラムが青木保存会の事務局のなかで取り組んでいる地域づくり活動である。「館山まるごと博物館」がエコミュージアムの取り組みとして評価されるのも、地域全体の総合性をもったモデル的な実践活動であるからである。たとえば富崎地区での取り組みをみると、学習活動しながら文化財保存活動を行う組織をつくり、その準備段階から結成後も、青木繁《海の幸》の誕生の家である小谷家住宅をはじめ漁労史や舟歌である安房節、そして富崎の食文化という3つの主な地域要素に着目して、地域全体を総合的に把握してきた。そのために地域活性化では、全プロセスに関わり、これまで8年にわたって富崎地区の人びとを全面的にサポートしてきたことは特筆すべきことである。

### 【用語の説明】

- \* 「場所の記憶」＝特定の場所やまちでの思い出、街並みや工場や倉庫などの近代産業遺産をはじめ、狭い路地、生活習慣、ちょっとした物語など、些細で目に見えないもの
- \* ローカル専門家＝地域において特定の分野に詳しい地域住民
- \* アクティベーター＝あるテーマに対する学習活動を主体的に企画する役割をもった仕掛け人のこと
- \* ローカル・キュレーター＝一つの分野だけでなく、地域全体を視野に入れながら動かしていく人



小高熹郎記念館

### 【主要参考文献・資料】

- 鄭 一止 『エコミュージアム運動としての「場所の記憶」の構造化に関する研究  
－一連の学習活動を通じた『場所の記憶』の複合とローカル・キュレーターの展開プロセス－』  
工学博士学位論文(東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻) 2012年
- 西村幸夫 『文化的景観研究集会 2009.2.20-21』「文化的景観と都市保全学」 2009年  
『文化遺産の可能性』「文化遺産の可能性-資産から資源へ-」 環境と公害 Vol.38No.1 2008年
- 後藤春彦 『場所性・地域継承システムと都市建築のフロンティア』「地域遺伝子の発見と継承」  
総合論文誌第10号 建築学会 2012年
- 『まちづくり市民事業—新しい公共による地域再生』学芸出版社 2011年  
『景観まちづくり論』学芸出版社 2007年
- 佐藤 滋 『まちづくり市民事業—新しい公共による地域再生』学芸出版社 2011年
- 北原啓司 「まちづくり展」シンポジウム・「復興まちづくりにむけて」日本建築学会 2011年
- 日本建築学会編『生活景』学芸出版社 2009年
- 丹青総合研究所編『ECOMUSEUM』丹青総合研究所 1993年

Dicks B 『Heritage, Place and Community』 Cardiff: University of Wales Press 2000 年

Peter Davis 「Ecomuseums and the Democratisation of Japanese Museology」  
『International Journal of Heritage Studies』 Vol.10、No.1 2004 年

馬場憲一「エコミュージアムづくりに求められるもの-学術性担保への課題」エコミュージアム研究第 12 号 2007 年

『館山市史編纂委員会編『館山市史』1981 年

(財) 地方自治研究機構／館山市『平和・学習拠点形成によるまちづくりの推進に関する調査研究  
-館山市における戦争遺跡保存活用方策に関する調査研究-』2003 年

千葉県歴史教育者協議会編『千葉県の戦争遺跡をあらく』国書刊行会 2004 年

NPO 法人南房総文化財・戦跡保存活用フォーラム  
『太平洋にかかる橋〜アワビがむすぶ南房総・モンレーの民間交流史』2005 年

NPO 法人安房文化遺産フォーラム『あわがいど①戦争遺跡-南房総に戦争の傷跡をみる』2004 年  
『あわがいど②房総里見氏』2008 年  
『あわがいど③海とともに生きるまち』2007 年  
『あわがいどマップ①海軍のまち・館山』2008 年  
『あわがいどマップ②黒潮に生きる漁村・館山富崎』2009 年

愛沢伸雄「市民による『稲村城跡保存運動』は実った」『歴史学研究』第 712 号 1998 年  
「安房の歴史・文化をいかした地域づくり」『子どもが主役になる社会科』  
千葉県歴史教育者協議会 会誌第 32 号 2001 年  
『足もとの世界から世界を見る-授業づくりから地域づくりへ』  
NPO 法人南房総文化財・戦跡保存活用フォーラム 2006 年

「戦跡をまちづくりに活かした館山市でのこころみ」『土木施工』657 号 2011 年  
「里見氏稲村城跡保存運動 17 年のあゆみ-地域に根ざした市民運動が実り『国史跡』に」  
『子どもが主役になる社会科』千葉県歴史教育者協議会 会誌第 43 号 2012 年

池田恵美子「館山・地域まるごと博物館〜ゆたかな歴史文化が息づくまちづくり〜」  
『まちむら』誌 98 号 公益財団法人あしたの日本を創る協会 2007 年  
「たてやま・地域まるごと博物館 “平和・交流・共生” の地域づくり」  
『旅のもてなしプロデューサー心編』日本余暇文化振興会 2008 年  
「『青木繁《海の幸》誕生の家と記念碑を保存する会』の設立」  
『子どもが主役になる社会科』千葉県歴史教育者協議会 会誌第 40 号 2009 年  
「市民が主役の文化財保存運動と生涯学習まちづくり『館山まるごと博物館』の事例」  
第 53 回社会教育研究全国集会(千葉大会)博物館分科会レポート 2013 年

愛沢 伸雄・池田恵美子「戦争遺跡を活用した『地域まるごと博物館』構想」『月刊社会教育』62 号 2007 年

NPO 法人安房文化遺産フォーラムHP

青木繁《海の幸》誕生の家と記念碑を保存する会HP

グオン・サング デグ文化<DAEGU CULTURE>HP

## 【注釈】

- 1) 著者はインタビュー調査とともに参加観察法を用いた。
- 2) ダイアグラム以外の写真は「NPO 法人安房文化遺産フォーラム」より掲載したものである。